

---

# 彼と彼女の恋愛事情

伊東歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼と彼女の恋愛事情

### 【Nコード】

N8776L

### 【作者名】

伊東歩

### 【あらすじ】

恋愛。それは奥が深く、それでいて広範囲に渡るもの。100人いれば100通りの愛情があるものです。この物語は、さまざまな視点で見る愛をテーマにしたオムニバスです。

## 手紙（前書き）

互いに想い合う男女。相手に対する思いや自らの近況を手紙に  
たためます。互いを支え合ったり、時には喧嘩をしたり。そんな二  
人にはある秘密がありました。

## 手紙

僕から君へ 1

お元気ですか？ 突然の手紙ってやっぱり緊張するね。でも君と話をする方法はもうこれしかないんだし、仕方ないね。

君に会いたいという気持ちは今もまったく変わっていません。君はどうかな？僕と同じ気持ちでいてくれるのかな？

君のことを初めて知ってからどのくらい経つかな？いきなりこんなこと言うのも何だけど、最初は今ほど君を好きだとか思わなかった。言い方悪いかな？ つまり一目惚れではなかったってこと。もちろん今は違うよ。いつも会いたいと思う、写真を眺めたりだっている。旅行の写真とかさ。

そうだ、最近の状況でも報告しようかな。僕は相変わらずあのコンビニでバイトの日々。特に変わったこともないんだ。近況報告って言うておきながら話すことなしなんてつまないよね、ごめん（笑）あ、そうそう。前に話した竹中さんって人。無事仲直り出来たよ。

最近は昔よりよくしゃべったりしてる。君のことそのうち話そうかな？でも紹介できないしね。もう少し考えるよ。

えっと。なんか改まって手紙とか書いてみたのはいいけどいざ書くうとすると思いつかないもんだね。男ってあんまり手紙とか書かないからさ（言い訳かな？）これから続けていったらそのうち少しは読めるようにはなると思うんだ。それまで根気強く待ってて、ごめんね。じゃあまたね。

私から貴方へ 1

突然のお手紙すごく驚きました。でも嬉しかったです。終わりの方の言葉から察するにこれからもお手紙をくれるってことでしょ？じゃあ私も書かなきゃね。なんか文通みたいで楽しいね。小学校以来かしら？友達とよくやってたつけ、交換日記とか。あ、でも私も

文章とか書くの苦手だからあんまり面白い手紙とか期待しないですね。私はしちゃうけど、なんて（笑）

私もちよつと近況報告でもしようかしら。私はようやく大学になじみはじめたところ。やっぱり慣れない土地だし不安とかあったけど。でも慣れない土地での新生活って言ったらあなたも一緒よね。こっちに來てもうすぐ半年になるのか。早いような遅いような。時々寂しくもなるんだけど私もあなたのことを思い出しながら毎日頑張ってます。

あ、そういえば！旅行の写真見るとか書いてなかったっけ？  
やめてよー、見ないでつてあれほど言つてたじゃない（怒）  
自分でも恥ずかしくて見れないんだから。あなたに見られたらもつと恥ずかしい。もういつそ捨てちゃつてよ。それが嫌ならもう見ないで約束よ。指きりげんまん。これ読みながらちゃんとやつてね。はい、指きりげんまんうそ  
ついたら針千本飲ます 指切つた！もう見ちゃだめよ、約束したんだからね。

ところで、竹中さんつてたしか私も一度見たことあるよね？  
写真で見たことあったから覚えてる。なかなか記憶力いいでしょ、えへへ。よろしく伝えといて、私のこと知らないだろうけど（笑）  
さてさて、最初だしこのくらいにしとこうかしら。じゃあまたね、次の手紙楽しみに待つてます。

僕から君へ 2

まずはじめに、あの写真見てごめんなさい。僕も後から気付いたよ、そういえば見るなつて言つてたなーみたいな（苦笑）でもかわいいんだしいいじゃない。とは言え一方的に約束させられたしなあ、もう見れないなあ。残念っ！（古いね）

そういえば昨日・・・じゃなくて一昨日か。一昨日の昼に真っ赤なソファが届いたんだけど、心当たりある？もう料金はいただいてますつて言つてたからとりあえず受け取つていたんだけど。僕は頼んでないけど君らしい趣味だし多分そうだと思つて。この部屋には

奇抜な感じもするけどすぐに馴染むと思う。でも結構高かったんじゃない？大丈夫だったの？まあ二言目にお金の話なんてちよつとあれだけどき。座り心地もいいし結構な大きさだし気になって。

まあそんなことはいいか。実はね、一昨日のバイトの時に店長に言われたんだよね。一日置きじゃなくなてなるべく毎日出るようにしてくれないかって。まあ学校もあるだろうから無理は言わないけどって。でもさすがに無理だねえ。僕はだいぶ仕事にも慣れてきたけど、だからって出来ないでしょ。説明しようにもどう言えばいいのか分からないから適当にごまかしといたよ。

今ふと鏡を見ながらにやけている自分に気付いてしまった、重症だね。いつか近いうちにちゃんと君に会いたいなあ。会ったら何をしようか？僕は定番だけど遊園地とか動物園とか行きたいかな。もちろん手を繋いでね。昼はイタリアンとかいいな。そして夜は高級なホテルのレストランでディナーを。完全に夢物語モードになっちゃった（照笑）でもその時のためにちよつとずつだけ貯金をしてるんだ。いろいろと節約したりしてね。そのせいかついこの赤いソファの値段が気になってしまって、つてもうその話はいいか（笑）

まあいつになるか分からないけど、その時のためにこれから頑張頑張って働こうと思います。では、明日も早いみたいなのでそろそろ寝ます。それじゃあまたね。

私から貴方へ 2

そのソファ気に入ってくれた？大学のお友達とウィンドウショッピングに行ったときに偶然立ち寄った家具屋さんで見つけて一目惚れしちゃった。きつとこの部屋に合うなあと思ったの。ばっちりでしょ？私って意外とセンスいいのよ。大きいからゆったり出来るでしょ。それでバイトの疲れをとって。

明後日は日曜日だね、友達と遊ぶ約束しちゃった。あなたはバイトバイトで大変なのにごめんね、何をしたかちゃんと報告する

から。お土産も買っし楽しみにしてて。甘いもの苦手だったよね。ちゃんと考えて買ってくるね。

なんか私も会いたくなっただなあ、あんまり考えないようにしてたのに。あなたが会ったときはこうしようあしようって言うからだよ。でもそういうの考えるのってすごいわくわくするよね。遊園地もいいけど私はどこか旅行に行きたいな。お風呂好きだからやっぱり冬の温泉街とか憧れる。混浴とか入っちゃう！？

でもまずはあなたに会えることが何よりの贅沢かな。お互いこんなだしそうそう会えるとは思わないけど・・・でもいつかは必ず一緒に旅行したり遊園地に行こうね！また指きりげんまんしとく？（笑）

そろそろテストが近いなあ。もしかしたらこうやって手紙を書く時間もなくなっちゃうかも。なんたってみんなの倍頑張らなきゃだし。でもなるべく書くようにするからね。短くても、たとえ一言だけでも書くから。

僕から君へ 3

そっか、もうテストの時期か。大変だよな、僕頭悪いから大学の勉強なんてとでもついていけないし。何か少しでも役に立てたらしいのにね、夜食を作ってあげるとか。でも無理か。君が食べる頃には完全に冷めちゃってるだろうし（まあ当然だけどさ）あ、でも冷凍できるようなものだったらいいんじゃない？チンすればすぐに食べられるようにさ。まあ知ってのとおり料理なんてまともに作ったことないしおいしく作れる自信はないけど。とりあえずお腹を満たすことは出来るんじゃないかな。よし、君がテストで頑張ってる間僕は少しでも料理の腕が上達するよう頑張ろう。いつか会ったときは僕の手料理を振舞うよ。またひとつ会ったときにしたいことが増えた。嬉しいような会えない辛さが増えて悲しいような。あ、そんなこと言っちゃいけないね。君だって僕と同じように会いたいと思ってくれてるんだから、その気持ちをむやみに膨らますような発

言は控えないと。テスト勉強に差し支えてしまうね。

手紙のことは気にしなくてもいいよ。勉強で忙しいときは無理に書いてくれなくても大丈夫だよ。そりゃあ寂しくないって言ったら嘘になるけどさ、大変な時期に君に無理をさせるくらいならそっちの方が全然いいよ。今の僕には料理上手になるという新たな目標も出来たしね。それにテスト期間が終わればまたたくさん書いてくれるでしょ。それを今か今かと待ってるのも悪くないんじゃないかな。別に強がりと言ってるんじゃないよ、大丈夫。少しでも君の力になれば嬉しい。テスト頑張ってるね。応援してるよ。

私から貴方へ 3

ありがとう。私のために料理の勉強を始めるだなんて、私はなんて幸せ者かしら。あなたの手料理楽しみにしておくね。

早い人は今日くらいから本格的にテスト勉強を始めてるみたい。私も負けてられないや。少しでも多く勉強しないといけない。そういえば今日お母さんから荷物が届いたんだ。なんか缶詰とかカップ麺とか食料が結構入ってた。テスト期間だから料理しないだろうなとか思われたのかしら？まあそのとおりだけどさ（笑）あとでお礼の電話をしないと。とりあえずその荷物はおいおい片付けることにするね。そんなに大量に届いたわけじゃないけど勉強しなきゃ。早速カップ麺をひとつ頂くことにします。太るから気をつけないと。

今日はこのくらいで。短くてごめん、テストが終わったらしいと書くね。あ、友達と遊んだこともちゃんと書くからね。それじゃあまた。

僕から君へ 4

やっぱり大変なんだなあ大学生って。まあある意味僕もそうなんだけど・・・でも君は本当によく頑張ってる。勉強勉強ってなってる時にこんな間の抜けたコメントごめんね。でも本当に思っんだ、



君は頑張ってるって。みんなの2倍頑張らなきゃいけない状況でよくついていけるもんだよ。僕が少しでも君の支えになってあげなきゃね。今日早速料理の本を買ってきた。料理器具は君が使ってた分が揃っているみたいだからあとは僕の腕にかかっているわけだ・  
って自分でプレッシャーかけちゃった(汗)もし食べて不味かったらお母さんから送ってもらったカップ麺を食べて。いやいや、そんな弱気でどうする、僕。君がこんなに頑張ってるんだから僕も負けられないよね。料理もバイトも人一倍頑張らなきゃ。

ふと思ったんだけど君がテスト勉強しているのに僕が長々と手紙を書いたら邪魔かな？読むのに時間を割いちゃうだろうし、君の時間が減っちゃうよね。テスト中は僕も短めにするよ。その方が君のためにもなるだろうし、なによりテスト後が一層楽しみになるもんね。それじゃあ今日はこの辺で。勉強頑張ってるね。

私から貴方へ 4

ご馳走様でした。ちょうど今あなたが作ってくれた夜食を食べ終えたところ。すごいじゃん、美味しかったよ。きつと出来たてはもつと美味しかったんだろうなあ。早く会って手料理をご馳走してもらいたい。まあ私も料理上手にならないといけないんだけど。っていうか私の方が上手くないとよね、本当は。

さてさて、いつまでも料理の余韻に浸ってる場合じゃないね。

いよいよ明後日からテスト。今日は仕上げのつもりで頑張らなきゃ。

あ、そうだ。ありがとね、夜食だけじゃなくて手紙のこと、気を遣ってくれて。私もあなたの期待に応えられるように努力します。4日くらいで終わるから、それまでちょっと待っててね。

私から貴方へ 5

終わったよー！ついにテスト終わりましたー。長い戦いがようやく幕を下ろしました。あ、なんかテンション高い。やっぱり勉強

から開放された喜びとようやくあなたに手紙が書ける嬉しさからかしら。あゝなんかすぐ落ち着かない。久々の手紙のような感じで緊張しちゃう。何か話したい。でも何話そっか？テストのこと言ってたてしょうがないしね。あ、そうだ、日曜日のこと話すって言うてたんだよね。何したっけな？悠ちゃんと愛結美ちゃんと遊んだんだけど、映画見てお昼食べて、って別にこれと言って盛り上がる話でもないなあ、あはは。

・ちよつと落ち着きました。まだお礼言ってなかったよね。夜食とか手紙のこととかありがとうね。本当に助かりました。なんか不思議だなあ、なんでもない普通の言葉のはずなのにすごい支えられた気分。まあテスト中は勉強ばかりで返せなかったけどあなたの手紙のお陰で頑張れました。ありがとう。これから友達と少し出かけてきます。夜にまた書くね。

ただいま。今は7時10分前。ちよつといつもより遅いかな？テスト終わったからって盛り上がっちゃったみたい（笑）でも少しくらいいいでしょ。私だって頑張ったんだから。でもほんと嬉しいこれからまたいっぱい手紙を書けるね。よろしく願います（ちよつと改まってみました）

僕から君へ 5

テストお疲れさま。よく頑張ったね、それは認める。認めるけど、羽目を外し過ぎなんじゃないかな？髪切ったんだ？・まあそれはいいよ。でもさ、染めたでしょ。茶色っぽくなってるもんね。間違いなく地毛ではないよね。前にも言ったよね？一人で勝手に決めるのは止めてくれって。ソファだってそうだ。僕に何の断りもなく買ってきた。これが君だけのものだったらいいよ、普通の人と同じようにさ。でもそうじゃないだろ。僕は何かをするときにはちゃんと君に言ってるつもりだ。もう一度よく考えてくれ。僕たちは僕と君であってそうでないんだ。

私から貴方へ 6

ごめんなさい、調子に乗ってしまった。似合うと思ったの。あなただって黒髪よりは染めた方がカッコいいし・・違うよね、そんなことが言いたいんじゃないよね。分かってる。あなたに無断でやったことが悪いんだよね。

悪気があったんじゃないの。これだけは信じて。なんて言うか、驚かせたかった。あなたに内緒でソファを買ったり髪を染めたりして驚いてほしかったの。でも怒らせちゃったね。ごめんなさい。もうやめるね。

私のこと嫌いになった？ なったよね、こんな自分勝手な人間なんて嫌いになって当然だね。もう止めようか、手紙。あなたも私みたいなより可愛くて優しい彼女を見つけて。本当にごめんね。さようなら。

僕から君へ 6

馬鹿なこと言うなよ。あれくらいで嫌いになるわけないじゃないか。そりゃあちよっとはむっときてしまったけど、今でもまったく変わらず君のことが好きだ。むしろそうやってしおらしくなれると余計に愛おしくなってしまったよ。僕たちは一心同体だ。どんなことも二人で乗り越えられる。前にも話しただろ。僕はずっとずっと君を好きでい続ける。たまには喧嘩もするかもしれない、怒って愛想を尽かしそうになるかもしれない。だけど結局僕たちは元に戻ると信じてる。そうだろう？ 君だって分かっているはずだよ、僕たちはずっとずっと一緒なんだ。離れることなんてできない。

一昨日は少し言い過ぎた。僕も謝るよ、ごめんね。でもこれからはちゃんとお互いによく話し合おうね。僕だっていつ君に迷惑をかけるか分からない。今回のテストみたいだね。君が少しでも時間がほしいときはなるべく早く交代してあげなきゃね。

さて、そろそろ寝ようかな。明日は「君の番」だ。明後日の朝君からの手紙を楽しみにしておくよ。それじゃ、おやすみ。

私から貴方へ 7

ありがとう。最近私よくお礼言ってるよね（笑）

今日あなたからの手紙を読みながら昔のことを思い出してた。初めてあなたを意識したとき。鏡の向こうの自分が、自分であって自分でないと悟ったとき。私は恐怖すら感じた。自分ではないもう一人の自分が、この体には宿ってるんだって怖かった。あなたも同じ気持ちだったかもね、だから一目惚れじゃなかったんじゃない？でも時間が経つに連れ私はあなたが愛おしく感じてきた。私と体を共有するもう一人の私。毎日鏡を見ながらあなたに話し掛けた。あなたも同じように私に話し掛けてくれていたの？

男のあなたと女の私。同じ人間でありながら別々の人生を歩む私たちは他人には分からない絆で結ばれてると思う。それは単に一人の人間だからということではなくて、共に愛し合う者同士だからでもなくて。理屈じゃないようで、すごく理に適っているようで。難しく考えるとキリがない。とにかく、私は自分と同じ容姿のあなたが好きで、あなたは自分と同じ容姿の私が好きで。一生会うことはできないのに旅行行こうとか夢を見たりして。それでも幸せだからいいのかな？私にはよく分からない。自分好きでもないのに他のどんなナルシストよりも自分を愛しているという不思議な状況。

明日はあなたの番。明後日は私の番。交互にやってくるあなたと私の人生。完全に交わっているのに決して交わらない二つの人生。それでも私は今日も鏡を見ながらその奥にいるあなたを見ている。決して会うことのできないあなたを愛している。

## 異生結婚（前書き）

同性結婚。その言葉が聞かれるようになって久しい昨今。人々の認識はどのように変化していったでしょう。これは、その先を行く（かもしれない）前衛的な発想の持ち主が主人公の物語です。

## 異生結婚

世の中には同性結婚なるものが広がりつつある。とは言えそれが一般的になるのはまだまだ先のことになるだろう。長年かけて積み上げられてきた人間の常識というものはそう簡単に覆されはしないのだ。ところで金田百合にはそれを批判する気も差別的に見る気もまったくない。むしろそれよりもっと（よく言えば）進んだ考え方をしていた。一般常識で言えばちよつと考えにくいものだ。世間ではそれを非常識というだろう。しかし百合にはなぜ今まで誰もこれをしなかったのかと不思議に思うほどだった

「まさに運命の出会いよ」

金田百合は職場の同僚と馴染みの喫茶店でコーヒーを飲んでいて百合の声はいつになく興奮気味だ。といっても百合の性格からしてこういう声を出すのはそう珍しいことではないのだが。

「それはいいけどさあ、」

同僚の小森明子は百合のそれとは対照的に少なからず呆れた声だ。  
「あんたん家ペット禁止でしょ。どうすんのよ、それ」

明子は百合の腕に抱かれる形でテーブルに置いてあるペット用のキャリーバッグを指差した。

「指差さないでよ。それに、『それ』じゃなくてカシス」

「さつき買ったばかりでもう名前付けたんだ」

「かわいいでしょ。カシスソーダみたいな色だし」

百合は腕の中の子猫をうつとりと見つめた。

「あんた飲みに行ったらカシスソーダばっかだしね。ってそんなことはどうでもいいから、ペット禁止のアパートに住んでるあんたがどうやってその猫を飼うのかって話よ。」

明子の問いに百合はさも当然のこのように言っただけだ。

「もちろん引越すわ」

百合のあまりの短絡さにしばし啞然とする明子。

「あんたねえ・先月やつと引越したばかりでしょ。あの苦労をもう忘れたの？」

明子は1ヶ月半前のことを思い返した。

百合が大学進学と同時に上京し入居した安アパート。もうかれこれ10年近くになる。元来大学生のためのアパートであつたので普通なら4年、長くても6年ほどで皆このアパートから出て行くことになる。しかし百合は大学を卒業し、就職してもなおこの安アパートにとどまっていた。気付くと百合はこのアパート一番のお局と化していた。引越さなかつたことにこれといって理由などない。ただ強いて言えば面倒だつたのだ。そんな百合が三十路を目前にしてようやく引越す決意を固めたのは他でもない明子の一言が原因だつた。

「このボロい部屋に男は呼べないでしょ」

高校からの付き合いである明子は異性との交遊にオープンな性格だつた。そこだけ見れば百合と明子はまったく正反対の性格と言えた。異性とあまり深い交流を求めたがらない百合の性格は10年近くもの間この古いアパートに住み続けることができた一つの要因とも言えるかもしれない。そんな百合が引越すを決意したのは明子の言葉通り男性を招いても支障のない部屋に住まなければと思つたからだ。それは明子のように軽い考えからではない。もうすぐ30歳だ。そろそろ真剣に結婚のことを考えるべき時期だと思つたからなのだ。

部屋探しという行為はこれほどまでに体力を要するものだつたらうか。家賃、間取り、立地条件。考慮しないといけないものはたくさんある。どれかを妥協したり変なところでこだわつてみたり。百合の新居探しは予想以上の体力と時間を消費した。そしてようやく先月の上旬に今の住まいであるアパートに辿り着いたのだつた。この目の前の友人はその今までの努力を一瞬の気の迷いで全てふいにする気なのか。

「今すぐその子猫返してきなよ。今なら間に合うって」

「冗談でしょ？なんでそんなこと」

「それはこっちのセリフよ。偶然、なんとなく暇つぶしで立ち寄っただけのペットショップ。「かわい〜」とか「ちっちゃ〜い」とか言ってひとしきり盛り上がりすぎて手ぶらで出てくるのが普通でしょ。なに買ったちゃってんのよ？しかもわざわざお金下ろしてきてまで」

そうなのだ。百合は今まさに籠の中で寝ようとしているこの子猫をペットショップで見つけた途端に血相を変えて外へと飛び出していった。何事かと明子が後を追うと百合は近くのＡＴＭで現金を引き出しているところだった。

「まさか・・・」

明子にみなまで言わせなかった。百合は引き出した現金を手早く財布に入れると再び先ほどのペットショップへと引き返した。ため息を一つついて百合を追う明子。店に入るとちょうどあの綺麗な赤毛の子猫が店員の腕から百合の腕へと渡されるところだった。

「買います」

百合の声には今までに聞いたことがないくらい強い意思が現れていた。明子にはもはやそれを引き止めることはできなかった。

「という訳で、明日から早速新しい住処を探さないと」

百合の目はどこか遠くを見ていた。カシスとの新しい生活に思いを馳せているのだろうか。

「一つ言っておくけど、このあたりはまだペットＯＫのところなんてほんと少ないのよ」

「分かってる。多少は他の条件を削る覚悟よ。カシスのためにもなんとかしてもいいところを見つけないとね」

百合は握りこぶしを作り力強く頷いた。なんとも勇ましい姿だ。

「もう何を言おうが通用しないわね」

明子は諦めた。１５年の付き合いから百合の性格は分かっているつもりだ。

「もちろん付き合ってくれるでしょ？アパート探し」



「またあの苦労をするのかと思うとかなり気が引けるけどね。でもさ、あんた結婚のことを考えて男を呼べるような部屋に引っ越すって目的だったわよね？」

「うん。それが何か？」

「聞いたことない？ ペットを飼うと婚期が遅れるって」

明子の言葉に百合はしばし黙った。ようやく目を覚ましてくれたか、明子は内心ほっとした。しかし、それも杞憂に終わる結果となった。百合が口を開く。

「分かった。じゃあ私カシスと結婚する」

十秒ほど友人の顔を見つめた後、明子はがっくりと肩を落とすのだった。

スタートが良からうが悪からうが新生活というものはほとんどの確立で気持ちのいいものだ。一ヶ月半前の新居探しでコソを掴んでいたのか、思いのほか早く新しいアパートを見つけたことができた。それでも百合も明子もだいたい体力を浪費したのだが。

「じゃあカシス、行って来るね。いい子で留守番してるのよ」

日課である挨拶と行って来ますのキスをして玄関を開ける。気持ちのいい朝だ。通勤するサラリーマンや登校途中の小学生たち。百合はスキップしたくなる気持ちをぐっと堪えてできる限りにやけなように顔面に力を入れていた。カシスとの新生活が始まってまだ2週間と経っていない。もちろんまだ新しいアパートに慣れず、それがまた百合の心を躍らせるのであった。

「おはよー」

職場に着くとすでに明子が出社していた。

「おはよ。朝っぱらから元気ね」

眠そうに目を擦っている。

「どうかした？」

「別に」

百合は室内を見渡した。百合は密かに明子が係長である田中健太

と恋仲にあると気付いていた。田中は妻子持ちなので明子とは不倫の関係関係ということになる。田中はどうか知らないが明子是不倫や浮気に寛容だ、なので百合はそのことについて彼女を追及するようなことはしなかった。どうやら彼もすでに出勤しているようだ。忙しそうにパソコンとにらめっこしている。ネクタイを見る。昨日と同じものだ。

「なるほど、眠たいわけだ」

「何か言った？」

「別に」

先ほどの明子の口調を真似て楽しそうに笑った。

「毎日毎日よくそんなにうきうきしてられるわね」

「まあね。私には裏切らない彼がいるからね」

「何それ？」

明子是不倫や浮気を気にする性格ではない。だから百合も何も言わない。しかし何も言わないからといって自分も気にしないというわけではない。不倫、浮気は裏切りだ、それが百合の考えだった。だから浮気や不倫などするはずがないカシスは絶対な信頼のおける存在なわけだ。

「で、例の彼とはうまくいつてるわけ？」

「もち、ラブラブよ」

嬉しそうににやける百合。その表情はまさに本当の彼氏の話をするような顔つきだった。親友の嬉しそうな表情が嬉しくないはずはない。しかし世の中には例外というものもあるのだなと思った明子であった。

仕事中はいつもそわそわしていた。早く帰ってカシスに会いたい、考えることはそればかりだった。そのため仕事のミスが目立つようになった。上司には毎日のように小言を言われるようになった。しかし百合はそんな環境さえ愛おしく思えてくる。会いたいという思いが募れば募るほど会えたときの感動が大きくなるものだ。腕時計を見る。よし、5時だ。今日も定時と同時に職場を飛び出した。

「カシスただいまー！」

勢いよく扉を開ける。毎度のことながら突然のことに驚くカシスだったが百合はそんな彼の様子にいまだ気付かない。カシスを見つめるなり飛び掛って抱きつく。

「寂しかったでしょ、ごめんねえ。いい子にしてた？」

いつも通りのやり取り。百合にとっては儀式に近い感覚になっていたかもしれない。毎日こうやってカシスを抱きしめることによって自分たちの繋がりをもっともっと深くなっていくのだと自分自身に言い聞かせるような感覚だった。百合の腕の中で苦しそうにもがくカシス。

「そんな暴れるほど喜ばなくてもいいよお」

ようやく百合の腕から開放されて逃げるように走り回るカシス。その姿も見る者の目にははしゃいでいるように見えるのだろう。百合は微笑ましい表情でそれを眺めるのだった。

一緒に暮らし始めてどれくらい経っただろう。カシスの体は百合が飼い始めたころに比べて1.5倍ほどに成長していた。もう赤ちゃん猫ではない。そうなるというんなことに興味を示し始めるのは当然のことだ。もちろんカシスも例外ではない。雑誌をびりびりに破ったりコードの類を齧るのはあたりまえ、椅子を経由してテーブルの上に乗るなどすでに大人の猫のようだ。化粧棚に登って化粧品から何からめちゃくちやにされたときはさすがの百合でも手を出したい衝動に駆られそうになるほどだった。

百合が住むアパートは玄関に小さな出入り口がある。ペット達がそこから自由に出入りするためのものだ。百合は今までその出入り口をガムテープで塞いでいた。何も分からぬ赤ん坊のうちから外に出すわけにはいかない。事故に巻き込まれるかあるいは迷子になってしまうだろう。だからこそ出入り口を封鎖していたのだ。しかしいつまでも外に出さないわけにはいくまい。外の世界にも行ってみたいだろう。いつまでも部屋のなかだけで生活してはストレスも

溜まってしまっただろう。

「ついにこのときが来たか」

ひとり感慨深い気持ちになりながら百合はそのガムテープを少しずつ丁寧に剥がし始めた。カシスが不思議そうにこちらを見ている。ガムテープを全て取り終えてもじつと見ているだけだ。きつと理解していないのだろう。百合はそつとその扉を押した。キイツと小気味よい音が響き玄関の床面に日が差し込む。カシスはそこでようやく気付いたようだ。玄関に駆け寄る。おずおずと首だけを外に出しあたりを見渡している。警戒しているのか、それとも未知の世界に怖がっているのか。だがその時間は長いものではなかった。じきにカシスはまるで慣れているとでも言うように軽快に外に飛び出した。思わず慌てて扉を開ける百合。

「ちゃんと帰ってくるのよ」

去り行くカシスを見つめながら叫んだ。無事帰ってくるだろうか？不安で仕方がない百合だったが、その心配は杞憂に終わった。どうやらカシスはこの家を自分の住処だと理解してくれていたようだ。「へへ、すごいじゃない」

とある喫茶店。明子はティスプーンでコーヒーをかき混ぜながらさして面白くもなさそうに言った。

「すごいでしょ、やっぱりカシスは偉いわあ。」

百合は明子の態度にまったく気付いていないようだ。嬉しそうに「彼？の話をしている。」

「でね、カシスったらね・・・」

「ねえ、もういい？」

「え？」

「私はあんたの猫の話なんか聞きたくないのよ」

「猫じゃなくて彼と言って」

「それがもういいつつてんの。口を開けばカシスカシスってさ。いい加減に目覚ましたら？」

そこで百合はようやく明子のお様子がいつもと違っていることに気

付いた。

「何よ？どうかしたの？」

「別に。いい加減あんたの話聞いてあげてるのも疲れたのよ。あんたのペットの話なんて興味ないの」

明子の言葉にかつとなった。

「ペットじゃない。カシスは私の大事な彼なの」

「また始まった。たかが猫でしょ、何が彼よ。頭おかしいんじゃないの？」

「おかしくなんてないわよ。何？急に。おかしいのはそっちでしょ。カンシヤク起こしちゃって。例の彼氏と喧嘩でもしたんじゃないの？」

明子の表情が険しくなった。何も言い返さない。

「なあんだ、凶星？私に八つ当たりしたわけね」

明子は押し黙ったまま口を開かなかった。

「話したくないならいいわ。それじゃ」

百合は伝票を掴むと明子を尻目にレジへと向かった。

その夜の事だった。百合はまた時計に目をやった。もう何十回目となる。時刻は22時。いつもならとくに帰っている時間だ。だが今日はまだ帰ってきていない。帰宅すると部屋にはすでにカシスの姿はなかった。百合は夕食も摂らずカシスの帰りを待った。探しにいこうか？そう思ったがカシスが行くところなど検討もつかない。もしかして連れ去られた？それとも何か事故に巻き込まれたとか？悪い方向にしか考えが行かない。百合はいても立ってもいられなくなってきた。とは言え自分には何もできない。こうやって悶々としながら彼の帰りを待つしかないのだ。再び時計を見る。大して針は動いていない。まるで時間が進んでいないかのようだ。

「だめだ、やっぱり探しに行こう。」

そう言うなり百合は玄関へと駆けた。動きやすいようスニーカーを下駄箱から出す。本当はそんなことをする時間すら惜しいのだが。

スニーカーを履くなり部屋を飛び出した。カシスが行きそうな場所・分らない。そういえば首輪を付けるのが可哀想だと思い一度も付けたことがなかった。それゆえ一緒に散歩に行ったことがない。とりあえず百合は走り出した。

「カシスー！カシスー！」

夜も遅い時間だというのに百合はお構いなしに大声でカシスの名を叫びながら走った。近所の公園、住宅地、河川敷。

心身共に疲れきって走れなくなったとき、すでに東の空は白み始めていた。

（とりあえず帰ろう。疲れちゃった）

百合は後ろ髪を引かれる思いで家路に着いた。

「ただいま」

いつもの癖でつい口を突いた。誰もいないはずの部屋は寂しく百合の声だけを響かせる。いや、声だけじゃない。小さくカチャカチャという音が聞こえる。そう、まるでフローリングの床の上を動物が歩いているような。百合はもどかしそうにスニーカーを蹴り脱ぐと居間へ飛び込んだ。

「カシス！」

突然の大声に驚くカシス。だがそれもいつものこととすぐにいつもどおりの素知らぬ表情に戻った。百合は近づくなりカシスを抱きしめた。苦しそうにもがくカシス。いつもどおりの光景だ。

「バカ、どれだけ心配したと思ってるのよ」

そう言っで優しく頭を撫でる百合。その手が止まった。何かを摘んでいる。動物の毛だ。

「この毛、カシスのじゃない・・ちょっとカシス、これ誰の毛よ？」  
そんな質問に答えるはずもなくカシスは百合の隙を見て腕からすりりと抜けていった。

「あんた・・まさかよその子と遊んでたんじゃ？」

だんだんと語尾が強くなる。その気配を察してかカシスは部屋を飛び出していった。

「待ちなさい！」

慌てて追いかけるがとても追いつくはずもなく、カシスは再び玄関を出て行った。

「この浮気者　！」

百合の叫び声が朝焼けの街に響いた。

「で、解決したの？」

数日後のオフィス。ようやく仲直りした明子に早速カシスの浮気の報告をしたのだった。

「解決っていう解決はしてない。何も言ってくれるわけじゃないし。とりあえず今回は特別に許してやるってことに決めたの」

「まあそうしないとらち空かないしね。ってかほんとに恋人みたいね。『これ誰の毛よ？』なんて最近の昼ドラでも聞かないっつーの」

「あはは。でもあれ以来おとなしくなった気がする。あんまり外にも行かなくなっただし」

「目当ての子にふられて落ち込んでるんじゃない？　って冗談よ。そんな目で見るとはじゃない」

明子の言葉について目つきを鋭くしてしまふ百合であった。

「そーだ、言い忘れてた。いいワインが手に入ってから一緒に飲もうよ。久々にカシス君も見たいしさ」

「いいね。じゃあ今夜早速」

午後5時。百合、そして明子は定時ちょうどに会社を後にした。

本当は一秒でも早く家に帰りたいかった百合だったが一旦二人で明子の家に寄ることにした。

「ほら早く早く」

「そんな急かさないでよ。着替えくらいいいでしょ。そんな急がなくてカシスは逃げないって」

明子を急かしに急かし足早に我が家へ向かう百合。数日振りの親友との酒の席のこともありいつも以上にうきうきとしている。しかしやはり一番嬉しいのはようやくカシスと再会できることだ。

「ただいまー！」

元氣よく扉を開ける百合。そこにはいつものように愛らしい顔のカシスが、いなかった。

「お邪魔しまーす、おーいカシス。あれ？どしたの？」

直立不動で固まったままの百合。明子が不審気に百合の目線の先を見る。そこには体を小さく丸めたままぴくりとも動かないカシスの姿があった。

数時間後、二人は動物病院で獣医と対峙していた。

「胃に大きな穴が空いていました。おそらく、ストレスによる胃がいえんだと。最近の様子はどうでした？食欲がなかったり元気がなかったりしませんでした？」

百合はかすかに頷くことしか出来なかった。最近おとなしいとは思っていた。しかしまさかそんな深刻な症状を抱えていたなんてまったく気付かなかった。明子が口を開く。

「あの、ストレスって・・例えばどんなことが？多分彼女には思い当たらないと思うんですけど」

「そうですね。たとえば外に出してもらえないとか、遊ぶスペースが極端に狭いとか。大きな物音が頻繁にするのもよくないですよ。大きな声も。もしくは・・そう、可愛がりすぎていたとか」

「可愛がりすぎがよくないんですか？」

「犬と違って抱きしめたりしても嬉しくない子ってのも少なくない。むしろ体の自由を奪われてストレスを感じるでしょうね。」

百合はほとんど麻痺してしまった頭で考えていた。大きな声、確かに毎日大きな声で驚かしていたかもしれない。今思えば抱きしめたりキスをしたりしているときの彼の様子は、少なくともすごく嬉しいという態度ではなかったかもしれない。彼に対する愛情は全て彼には負担になっていたということだろうか。今まで私が一生懸命注いだ愛情は全て彼を蝕む要素になってしまっていたというのか。

「まあとにかく、可愛い可愛いだけではなくきちんとペットの気持



ちも考えながら飼ってあげることです。次からの子はそこを気をつけるといいでしょう。ご冥福をお祈りします」

あれからどのくらいの月日が経っただろう。百合は相変わらず放心状態だった。

「気持ちには分かるけどさ、そろそろ切り替えようよ。いつまでもそう思いつめてたって辛いだけじゃん」

明子はコーヒーにたっぷりのクリープと砂糖を入れてかき混ぜた。百合に差し出す。少しだけ口をつけた。

「おいしい」

「こんなときはやっぱりおいしいものを食べる。もしくは癒してくれるヒトを探す！ってことで、そろそろ行こうか」

喫茶店を後にする。今日は日曜日、新しい出会いを求めて街へ繰り出してきたのだ。

「ナンパ待つならやっぱり駅前かしら？いや、女二人でカラオケってのも以外にくるなあ」

揚々と歩を進める明子。その姿に少なからず元気付けられる百合だった。

（そうだよな、そろそろちゃんと人間の彼氏探さないかね。）

そう思いながらふと、ある店の前で自然と足が止まってしまった。

「どしたの？」

「これは、まさに運命の出会いよ」

少し前に聞いたセリフ。いやな予感を感じつつ明子は百合の目線の先を見た。

「・・・今度は犬か・・・」

もうこの娘に普通の恋愛は無理だな、そっと心の中で親友を哀れむ明子であった。

## 一夜八愛（前書き）

恋愛とは必ずしも1対1で成立するとは限りません。一方的な愛情、それもまた恋愛の一つです。それと同時に、愛とは必ずしも美しく完結するというものでもありません。たとえそれがゆがんだ愛でも、愛は愛なのです。

## 一夜八愛

倉橋家。この辺りの人間でその名を聞いて知らぬものはまずいない。家は昔から代々の資産家で、今の当主、つまり主人は大手経営コンサルティング会社の社長である。倉橋家の敷地はまさに広大と言っても過言ではない広さだった。家自体もちろん大きい。更に庭はまるでそこで野球でもするのではないかと思わせるほどの広さを誇っていた。それで知らぬ者などいようはずがない。しかし倉橋家が有名なのはそれだけではない。家族の仲の良さも近所で評判だった。主人である倉橋孝雄を筆頭に、妻の香苗、大学2年生の長男幸雄、高校1年生の長女愛の4人は、まるで絵に描いたように仲睦まじい家族だった。香苗は元ミス日本という輝かしい過去を持ち、その遺伝子を色濃く受け継いだ幸雄と愛もそれぞれ美男美女に育った。

「愛、起きてるか？」

ある夜のこと、ドアをノックする音が愛の部屋に響いた。兄の性格を思わせるような優しい響きだと愛は思った。

「うん。どうぞ。」

ドアを開け幸雄を招き入れる。

「どうしたの？こんな時間に。」

「いやあ、最近俺も愛も勉強が忙しくてあんまりゆっくり話もしてないだろ。明日は休みだし、たまにはこうして語り合つのもいいかなと。」

「何それ？変なの。」

愛は笑いながら、ベッドの縁に腰掛けた。幸雄も寄り添うように隣に座る。

「今日は満月だ。電気消して見てみるか？」

「そうなの？どおりで外が明るいと思った。」

上半身を後ろに捻り窓から空を覗く。真丸い月がいつもより強気に自己主張している。その時だった。ふっ。と、突然部屋の明かりが失われた。きゅと短く声を発する愛。

「停電？」

「どうかな？大丈夫かい？」

幸雄は愛の腕を掴んだ。

「がしゃーん！」

「きゅーっ！」

ガラスの碎け散る音。そして何者かが部屋に侵入してくる気配があった。

「まさに運命だね、愛ちゃん。こんな絶妙なタイミングで停電になるなんて。」

「だ、誰だお前は！」

目が慣れないながらも必死で愛を自分の背に隠す幸雄。愛は兄の背中越しから侵入者を見つめる。月明かりのおかげで思ったより早く目が慣れてきた。見覚えのある顔だ。牛乳瓶の底を連想させるような円形の眼鏡が目につく。

「その眼鏡、もしかして安藤君？」

「知り合いか？」

「同じクラスの安藤智樹君。なんでこんなことを？」

智樹は愛の口から自分の名が聞こえたことに高揚を感じずにはいられなかった。

「ああ、愛ちゃん。もっと僕の名を呼んでくれ。」

口を不気味に歪ませて両手を広げる。その右手にきらりと光るものが見られた。果物ナイフだ。

「何なんだ、お前は。」

幸雄は後ろ手に愛の腕を握り、愛の体を隠すようにぐつと胸を張った。それを見た智樹は歪んだ笑顔を引っ込め、幸雄に向けて果物ナイフを突き出し睨み付けた。

「おい、離れるよ。僕の愛ちゃんにくっつくんじゃない。」

「お兄ちゃん。」

兄の服をぎゅっと握り締める愛。幸雄は智樹から目を離さないまま小声で愛に囁いた。

「いいか、俺が合図を出したら下に逃げるんだ。」

幸いなことに3人の配置は、ドアに近い位置に愛と幸雄、智樹は部屋の反対側の窓側にいた。

「早く離れる。愛ちゃん、さあ僕のところへおいで。」

一歩、また一歩。じわじわと近づいてくる。それに合わせるようにじりじりとドアの方へと後ずさる二人。そして、

「今だ、行け！」

幸雄が叫ぶと同時に愛は駆け出した。すばやくドアを開け廊下へ飛び出す。廊下もやはり部屋同様に明かりは消えていた。次いで幸雄も飛び出した。智樹が来る前にドアを閉める。せめてもの時間稼ぎだ。階段は愛の部屋を出てすぐ右にある。全速力で、しかし踏み外さないように確実に駆け下りていく。

「待てえーっ！」

一瞬の間を空けて智樹が追いかけてきた。声に殺気がこもっている。

「父さんの書斎に入るんだ！」

一階には居間やキッチン、その他いくつかの部屋にはすべてドアがある。そこに逃げて先ほどのように時間を稼ぐよりはドアが一つしかない孝雄の書斎に逃げ込む方が確実だ。書斎のドアには鍵も付いている。2つドアをやり過ごし、3つ目のドアを開け飛び込む。

「お兄ちゃん、早く！」

すばやく体を滑り込ませドアを閉める。鍵を掛けた瞬間、ノブを掴み激しく捻ろうとする音が聞こえた。

「開けるお！愛ちゃんを出せ！ブツ殺すぞ！」

「な、何なんだよ、あいつは。頭おかしいんじゃないのか？」

「普段はあんな、あんなこと、する、人じゃな、ないのに。」

愛と幸雄は肩で大きく息をしていた。冷や汗というやつだろうか、

体中がじつとりとしている。そよそよと吹く込む風が気持ち良い。風？几帳面な父が窓を開けたまま書斎を離れることなどないはずだ。まして夜となればなお更だ。二人の顔から血の気が引いた。窓に目をやる。割られていた。

「お兄ちゃん。」

さすがに様に寄り添う愛。すぐ背後に気配を感じた。

「なに幸雄さんにべったりくっついてんのよ、あんた。」

「きゃーっ！」

絶叫して幸雄の背に飛びのく。

「誰!？」

「まさか、浅賀さん？」

そこに立っていたのは幸雄の1年後輩の浅賀美佐だった。幸雄を見つめる、印象的な大きな瞳は暗闇であるのにきらきらと輝いて見えた。

「こんなところで何してるんだ？」

「停電はまさかあなたが？」

美佐は幸雄を見るときはまるで対照的な冷め切った目を愛に向けた。

「停電？ああ、まさにちょうど良いタイミングだったわ。まるでこの家が私を受け入れてくれる段取りをしてくれたみたいに。ね、幸雄さん。」

再び先ほどの瞳で幸雄を見つめる。

「どういっつもりなんですか？」

美佐は月を見上げ、芝居じみた調子で言う。

「どうもこうもないわ。こんな綺麗に満月が輝く今宵、私たち二人は結ばれるのよ。」

「何を言ってるんだ？」

不意に顔を幸雄たちの方に戻した。目は冷ややかだ。愛を見ている。ずいっと歩近づいた。

「私は幸雄さんのことなら何でも知っているわ。身長体重から、好

きな食べ物に服の趣味。もちろん妹のことが好きだつてこともね。」  
後半のセリフは苦々しくはき捨てるような声だった。

「え？それどういう・・・」

「そ、そりゃあ妹のことは大事に思っているさ。当たり前だろう。」

「とぼけなくてもいいわよ。私は幸雄さんのことは何でも知っているの。あなたは知らないんでしょう？幸雄さんがあなたの下着で毎夜毎夜何をしているのか。」

「で、でたらめを言うな！」

幸雄が今にも掴みかかりそうな勢いで怒鳴った。それとは対照的に、美佐は恍惚の表情を浮かべている。

「怒ってる顔も素敵ね。もっといろんな表情を見せて。」

「何をしているのか自分で分かっているのか？」

「狂ってる。」

囁いた呟いた愛の言葉を聞き逃してはいなかった。かつと目を見開く。

「黙りなさい！大体、あなたがいるから幸雄さんが私を見てくれないのよ。あなたさえいなければ。」

「待てよ。」

幸雄は、愛に掴みかかろうとする美佐の前に立ちはだかった。美佐はふうつとため息をつき、胸の前で、何かを払うように右腕をすつと横に滑らせた。

「うあつ！」

幸雄は左腕に鋭い痛みを感じ思わずうずくまってしまった。この女は刃物を持っている。その時ようやく気付いたのだった。

「お兄ちゃん！」

「すぐ終わるから、お利口にして待っててね、幸雄さん。」

美佐はにこりとして、腕を押さえ苦痛に呻いている幸雄の脇をすり抜けた。

「逃げろ、愛。」

のどの奥から絞り出された声は、愛を突き動かすまでの力はなか

った。美佐のゆっくりとした歩調に合わせて後ずさる程度しか出来ない。とん、と背中当たる本棚。すぐ左手は窓に面した壁。部屋の隅に来てしまった。美佐は余裕の笑みを浮かべていた。

「幸雄さんを今まで独り占めしていたのは許せないけど、特別に許してあげる。一瞬で終わらせてあげるから、じたばたしちゃだめよ。」

右手のナイフを掲げた。血塗られて不気味に光るそれを見て、愛はもはや叫び声すら上げられなかった。

竹下和也は部屋で一人考えていた。と言っても自分の部屋ではない。いつものように庭の木の上から部屋を覗こうとした矢先、突然家中の電気が消えた。その後何か叫んでいる声や物音が聞こえたが、声の内容までは聞こえなかった。きつと突然の停電に皆が騒いでいただけなのだろうと思っていたが、なかなか電気が点かない。不信に思い、意を決して家の中の様子を見に行くことにした。自らの境遇を鑑みて、

（こんなことは俺の意識に反するんだが。）

和也は雨どいを伝って二階へよじ登ろうと試みる。だがうまくいかない。どうも靴が滑ってしまうようだ。

（慣れないことは仕方ない、靴は脱いでいこう。）

苦勞して愛の部屋のベランダに降り立ったとき、窓ガラスが割られていることに気がついた。ただの停電ではない。慎重に部屋の中を見渡した後、進入した。そう、和也が今いる場所は愛の部屋だった。窓ガラスの破片を踏まぬようゆっくり歩く。部屋が荒らされた形跡はない。窓から見て左手にあるタンスに目が行った。近づき、一段開ける。洋服がきちんと整理されていた。和也は愛の部屋着姿が好きだった。どれも品があり趣味が良い。そつと戻し、一つ下の段も開ける。そこには下着が収められていた。一分のずれも見られないほど綺麗に並べられている。

（窓を割って乗り込んでくるような逸脱したことをしておきながら、



下着を漁るというストーカーじみた行為にはおよんでいない。部屋に侵入してきたやつはただの強盗か、或いは相当余裕がなかったか、だな。」

下着の群れの中に手を入れ、列を崩さぬようそつとその中の一枚を取り出した。自分の鼻に押し当て、思い切り息を吸い込んだ。思わず口元が緩みそうだった。その時、隣の部屋からカタツという物音が聞こえた。緊張が走る。隣の部屋は確か兄の幸雄の部屋だ。下着をジャケットのポケットにしまい、音が立たぬようそつとタンスを閉めた。部屋のドアは開けっ放しだ。そこから廊下の様子を探る。右手は一階に通じる階段。左手には、こちらから見える形で通路がL字型に続いている。ここ以外にドアは3つ。兄、そして両親各一人ずつの部屋だろう。人の気配はない。

（幸雄の部屋にいるのは誰だ。幸雄と、そこに逃げ込んだ愛さんか？それとも侵入者？幸雄と愛さんだとして、なぜ会話すら聞こえない？では、侵入者？いや、愛さんの部屋から進入しておきながらなせ兄の部屋に隠れる必要がある？どちらにしても不自然だ。）

和也は幸雄の部屋へ入ってみることにした。慎重にドアを開け、中の様子を伺う。部屋の造りは愛のそれと間逆だった。入って右手奥に机、その後ろにベッドが置かれていた。こちらで愛の部屋同様一分の隙なく綺麗に片付けられていた。いや、一つだけおかしい。机の上が多少散らかっている。勉強の途中だったのだろうか？それにしては乱れすぎているような気がする。考えすぎだろうか、ただそのような性格なのかもしれない。誰もいないようだ。窓が開いている。風で何かが揺れた音だったのか。ほっと息をつき、そして気付く。窓はただ開いているではなかった。窓の中央付近が小さく割られていた。そこから手を入れて鍵を開けたのか。つまり何者かが進入してきたということだ。そして、やり口から考えるに愛の部屋に侵入してきた者とは別人で、共犯者ということでもなさそうだった。部屋の中央に歩を進める。こちらのタンスは愛のものより大きい衣装ダンスだった。観音開きのその扉は、右側が微かだがきちんと閉

められていなかった。

（なるほどね。）

普段から護身用にと持ち歩いているバタフライナイフを取り出した。慎重に、じりじりと近づいていく。

音楽鑑賞が唯一の趣味である倉橋孝雄は、完全防音である音楽鑑賞専用の部屋でいつものようにワインを片手にクラシックを楽しんでいた。アイマスクをしてその世界に入り込む。しかし、不意にその音楽が止み、現実に取り戻された。アイマスクを取っても、同じように部屋が暗闇に包まれていた。少し腰を浮かす。

（停電か？まあすぐに戻るだろう。）

リクライニングチェアに座りなおし、手探りでワイングラスに手を伸ばす。一口喉に通すと、すぐに気分が良くなった。静かな闇もまたいい。

（もう少しゆっくりして動き出さかな。今日は香苗も目を覚ますことはないだろうしな。）

孝雄はにやりと笑い、グラスをテーブルへと戻した。

ぱりい　ん！！

見ずに戻すなど慣れたものだった。しかしいつもとは勝手が違っていたせいかグラスを落としてしまったようだ。

「ちっ。」

片付けるか、と起き上がった。だが相変わらず真っ暗だ。思わずアイマスクを取る仕草をして、自分でふつと笑ってしまった。

「痛っ。破片を踏んでしまったか。まったく幸雄は何をやっているんだ？どうせブレーカーが落ちただけだろう。すぐ入れなおせばいいものを何やって・・・」

そこではつとした。

「まさかあいつ・・・！」

ガラスの破片を踏まないように慎重にドアまで辿り着く。部屋を飛び出しすぐ隣の部屋へと駆け込んだ。キングサイズのベッドでは

妻の香苗がすやすやと寝息を立てていた。ずかずかとベッドに上がる。こんなことで目を覚まさないことは実証済みだ。枕もとに飾つてある日本刀に手を掛ける。飾りといつても、その切れ味は本物だった。鞘ごと掴み、再び大股で部屋を後にする。二人はどこだ？

「幸雄め、愛は俺のものだぞ！」

廊下を直角に曲がつてすぐの部屋。幸雄の部屋だ。物音が聞こえた。そこにいるのか。

「幸雄お。」

部屋に入るなり怒鳴る。目が合ったその男は、まだ目が慣れぬ月明かりの下でもはつきり分かるほど幸雄とは似ても似つかぬ男だった。

「だ、誰だお前は！」

日本刀の切っ先を相手に向けた。

（なんで刀なんか持つてんだよ？）

あまりのことに和也は固まってピクリとも動けなかった。

「泥棒か？お前がブレイカーを？」

二人は対峙したまましばらく動かなかった。

（隙を見て逃げるしかない。）

和也はじわじわと後ずさった

（このベランダの真下は芝生が広がっていた。この日本刀男が階段を下りて追いかけてくるころにはなんとか立ち上がって逃げられるはずだ。）

静寂は突然切り裂かれる。一階から、ガチャガチャと激しくドアノブを回す音が響いた。その瞬間、弾かれたように和也は動き出した。後ろへ振り向き一目散に窓の方へ走る。待て！男のあわてた声が聞こえる。大丈夫、逃げ切れる。そう思った瞬間、足の裏に激痛が走り、体がぐらついた。

（窓ガラスの破片だ。）

それが和也の最期の思考だった。

二階ががたと騒がしい。相変わらず愛と幸雄が逃げ込んだ部屋のドアは開かない。智樹は隣の部屋に一時身を隠すことにした。物置部屋のような。窓が小さいせいで部屋を見渡すのに苦労した。どうやら季節はずれのファンヒーターや冬物の服がきちんと整理されているようだった。愛たちが逃げ込んだ部屋に面した壁に耳を当てて様子を伺う。話し声だろうか、よく聞こえない。これでもかというほどに耳を押し当てる。その時だった。

「きゃああ　っ！」

愛は絶叫した。振り上げられたナイフを前に、死を悟り目を閉じた。

「あ、あれ？」

不自然なまでの間を感じ、恐る恐る顔を上げる。

「お兄ちゃん！」

幸雄が美佐を後ろから羽交い絞めにしていた。

「は、離しなさい！」

激しく悶える美佐。幸雄は左腕の激痛に意識を持っていかれそうなのを必死でこらえた。

「うおおーっ！」

気合とともに、美佐を羽交い絞めにしたまま大きくのけ反る。そのままジャーマンスープレックスの要領で美佐を床に叩きつけた。ぐしゃっという感触を腕に感じながら、幸雄はのろのろと立ち上がった。

「愛。」

「お兄ちゃん！」

駆け寄る愛をぎゅっと抱きしめた。

「死、死んじやったりしてないよね？」

美佐は不自然に首を曲げたままピクリともしない。

「たぶん、な。」

「警察に通報しなきゃ。」

「ああ、でもちよつと休ませてくれ。ここなら鍵もかかつてさっきの・・・」

「安藤君？」

「そう、安藤。あんなやつに君付けしなくていいよ。あいつも入ってこれないだろ。」

そう言つて幸雄は愛を抱きしめたままその場にしゃがみ込んだ。

「怪我の手当てしなきゃ。」

「大丈夫。それより、愛。」

「ちよ、え？何？」

幸雄が顔を近づけてきた。キスでもするかのように。体もやけに摺り寄せてくる。美佐の言葉が愛の頭をよぎる。「幸雄さんがあなたの下着で毎夜毎夜何をしているのか。」

「やめてよ。」

両手を突き出すように兄を引き剥がす。

「とりあえず安藤君の隙を見て私の部屋に逃げよう。一階より二階の方が安全よ。ケータイも部屋にあるし、そこから警察呼ぼう。お父さんたちにも言わなきゃ。」

「・・・そうだな。」

二人は立ち上がり、もう一度美佐が起き上がらないかと確認した後、ドアに向かった。耳を当て廊下の様子を伺う。

「どう？」

「何も聞こえない。もしかしたら外に回ったのかも。」

「じゃあやつぱり二階に行った方がいいよ。」

そつとドアを開ける。左右を素早く見回し、智樹がいないことを確認した。

「よし、今だ。」

一目散に階段を目指す。恐怖や疲れのせい、足が重い。だからと言って速度を緩めるなどしようものなら智樹がいつ隙を付いてくるとも分からない。ちよつとの距離なのに息が切れる。階段は更に堪えた。一段一段上るたびに体が重くなる感じだった。上りきると

きにはもはや歩いている程度の速度だった。

「っ、着いた。」

部屋に入るなりベッドに座り込んだ。

「警察に電話を。」

「幸雄おお。」

殺気を帯びたような不気味な声に二人してどきりとした。ドアを閉めるまもなく誰かが飛び込んできた。血まみれの男。

「お・お父さん。」

「どうしたんだよ？怪我でもしたのか、父さん。」

「黙れ。幸雄、お前が愛をどう想おうが勝手だ。だが手を出すのだけは許さん。」

孝雄の目はもはや正気を失っていた。

「何言つてんだよ。ってか・・その刀・・」

「愛は俺のものだ！誰にも渡さん！」

柳田正敏は震える手で衣装ダンスの扉を開けた。足元には真つ二つに切り裂かれた青年が横たわっている。正敏は呆然とした頭で考えていた。昔から自分は他の男とは違うと思っていたが、何が違うのか、自分でも分かつていなかった。それを気付かせてくれたのが幸雄だった。正敏は男でありながら、あまりに整った容姿を持つ倉橋幸雄に惹かれてしまったのだ。高校入学で出会って以来、ずっと想い続けてきた。そして今日、その思いに決着を着けようと思いここへ来たのだ。寝首を掻こうとロープを持参して。どうせ結ばれることはない、ならばいつそ幸雄などいなくなってしまう方がいい、とそれが、何なのだ、この様は。なぜ見ず知らずの青年が切り殺されるシーンを見る羽目になったのだ。

「愛は俺のものだ！」

となりから絶叫が聞こえた。先ほどの日本刀男、幸雄の父である倉橋孝雄だ。正敏は、死体が握っているバタフライナイフを手に取りベランダに出た。そこから愛の部屋のベランダへと飛び移る。気付

かれぬようにそつと中を覗いた。こちらに背を向けて幸雄の妹の愛、幸雄が立っている。二人に対峙するように孝雄がこちらを向いてた。今なら幸雄を殺せる。いや、その前に孝雄に切り殺されるだろうか。今はまだ身動きは取れなかった。

叫び声が聞こえたときは冷や冷やしたが、声から察するに、愛は無事のような。智樹はほっと息を付いた。その後、二人が階段を駆け上がる足音が聞こえた。駆けている、というほどのスピードとは思えなかったが。それから少しして、男の声が響いた。

「愛は俺のものだ！」

誰だ？兄の幸雄？父の孝雄？どちらにしても家族という意味での言い方としては不自然だ。まるで自分の女だというような。そう思ったとたん、頭にかつと血が上がった。俺のものだと？馬鹿が！愛ちゃんは僕のものだ！智樹はナイフを握りなおし、部屋を飛び出した。一気に階段を駆け上がる。

「愛ちゃん！」

「あ、お前！」

「安藤君。」

「何者だ？お前は。」

こちらに背を向けていた男がこちらを振り向く。おそらく父親の孝雄だ。その手には、

「刀！？」

智樹はドアの手前で立ち尽くした。ちらと愛を見やる。怯えて、幸雄に寄り添っている。幸雄の腕が愛を庇うように後ろへと回された。

「何触ってんだよ！愛ちゃんから離れろおお！」

再びかつとなった智樹は刃物を持っていない幸雄へと一気に切りかかった。

「きゃあああつ！」

「馬鹿野郎。」

目の隅に孝雄が何か呟くのが見えた。

「愛は俺のものだって言ってるだろうがっ！」  
ずどんっ！

そんな衝撃だった。一瞬にして智樹の体は上半身と下半身に分断されたのだった。

「あ、ああ・・・」

もはや愛の喉からはまともな声はでなかった。擦れたうめき声もれるだけだ。幸雄は足元に転がる智樹の腕に目をやった。ナイフは握ったままだ。すぐさまそれを奪い取る。愛が何かを叫んだのはその時だった。

静寂は崩れた。また新たに男が現れたのだ。その男は一瞬怯んだ様子を見せたものの、何かを叫びながら幸雄の方へと突っ込んでいった。幸雄も孝雄も完全にそちらに気が行っていた。今だ。窓から飛び込み幸雄に切りかかる。幸雄はこちらを背にしゃがんでいた。ベッドに飛び乗り完全に背後を取った。

「お兄ちゃん！」

余計なことを！幸雄の背中がピクリと反応するのが分かった。

「邪魔だ！」

愛を殴り倒しもう一度幸雄を見る。遅かった。素手だったはずの幸雄の腕には果物ナイフのようなものが握られていた。そしてその切っ先は今まさに正敏の心臓めがけまっすぐに刺さっていた。手からバタフライナイフが零れ落ちる。そうか、今切り殺された男が持っていたナイフ。これを拾うためにしゃがんでいたのか。理解し終えたときにはもう、正敏の思考は完全に停止してしまった。

「柳田か？何なんだ、次から次に。」

正敏の胸からナイフを引き抜き、すぐに孝雄へと向き直る。すでに孝雄は攻撃を仕掛けてきていた。

「おおおおっ！」

気合とともに振り上げた刀を一閃。



「くそおっ！」

幸雄は間一髪でそれをかわすと、背後に回りこみ孝雄の腰あたりにナイフを突き立てる。体重を乗せぐりぐりとねじ込む。

「ぐあああっっ」

苦痛の呻き。どうにか体をひねり幸雄を振り払う。すぐさま刀を構えた。しかし膝を上げることすらままならない。幸雄は武器を探した。そうだ、正敏が何か持っていたはずだ。どこに落とした？ 孝雄を牽制しつつ目で部屋を探る。見つけた。幸雄と孝雄のちょうど中間のあたりに、月明かりに鈍く光る刀身が見えた。

「うぐぐ・・・」

孝雄は腰の激痛のせいか目の焦点が定まっていなかった。飛び込むように転がりナイフを拾う。立ち上がったときによく孝雄が焦った様子で動き出した。しかしまだ構えてもいない。勝った。

「死ねえ！」

がっ。突然体が止まった。後ろから誰かに羽交い絞めにされたのだ。

「幸雄さん。私になんて仕打ちを・・・」

「浅賀！ 離せ。」

「もう離さないわ。一生一緒に・・・」

「そんなことを言ってる場合じゃあないんだ、このバ・・・」

不意に声が出なくなった。いや、出たかもしれないが少なくとも幸雄自身の耳には届いていなかった。背後の美佐もろとも、日本刀に胸を串刺しにされていた。そのまま日本刀ごと突き放す孝雄。幸雄と美佐はぴたりとくっ付いたまま、二人して床に突っ伏した。

「願いが叶ったじゃないか。なあ、愛。」

孝雄は愛に向かって笑った。だがそれはとても今までの父のそれとは似ても似つかぬ、恐ろしく不気味な、歪んだ笑みだった。

「さあ愛、二人きりになったな。もう怖くないぞ。ふふ、父さんが慰めてやる。」

じりじりとにじり寄る孝雄に、愛は顔を引きつらせて後ずさった。

「さあこつちへおいで。」

更に一步踏み出した。孝雄の腕が愛の足首を掴もうとしたまさにその時、  
どおん！

左太ももの激痛にうめき声を上げる。

「きゃああつ！」

信じられないと言った顔でドアの方を見やる孝雄。そこには孝雄と同年代ほどの中年の男が一人立っていた。手には拳銃が握られている。

「ブレーカーを落として、お前が配電盤のところに来たらこれでズドン、の予定だったんだが。なかなか来ない上にやけに騒がしいと思ったらこの様だ。一体何があったんだ？」

男の右手には黒光りする鉄の塊が握られている。そのときようやく、先ほどの銃声だったのかと気付いた。

「お前は、誰だ？」

「どうせ覚えちゃいないんだろうな。俺たちが大学生のころ、お前は金に物を言わせて俺の彼女、相田美津子を自分のものにした。その後、散々彼女を弄んだ拳句ゴミくずのように捨てやがった。」

「お前、谷山か。もう30年も前の話じゃないか。今更何を・・・」  
「予想通りの発言だな。お前はその程度にしか人を見れないんだ。俺みたいに一途に一人の女を愛せないのか？なあ、美津子。」

谷山は上着のポケットから何かを取り出した。愛おしそうにそれに頬ずりをする。愛はそれを見た瞬間卒倒しそうになった。人の手だ。

「まさか・・・」

「美津子さ。こいつはもう俺を裏切ることはない。俺たちは永遠に愛し続けるんだ。そのために、忌々しい過去は消さなきゃあいけない。そういうことだ。」

言い終わると、銃口を孝雄に向けた。

「待て、馬鹿なことは・・・」

どおん！

先ほどと同じ音が部屋中に響いた。余韻。そしてしばしの静寂。「さて、お嬢さん。ひどい有様だねえ。こんなんじゃこの先一人でまともに暮らしていけるはずがない。安心しなさい、楽にしてあげるよ。あんな最低な男でも君の父だろう？ 後を追うといい。」

男は優しく、そして冷酷に言い放った。まだうつすらと煙の立ち上る銃口を、今度は愛に向けた。

「目を瞑って。大丈夫、一瞬だ。」

もう終わりだ。愛がそう思ったとき、不意に谷山の体がぐらついた。誰かに押されたのだ。とは言え思い切りではない。1、2歩よろけても体勢はすぐ立て直せる。そう思った。だが、部屋中に飛び散った正敏の、或いは智樹の、或いは幸雄の、或いは忌まわしき孝雄の血液がそれを許さなかった。踏み込んだ足はずるつと気持ちの悪い感触を伝えるだけで、谷山の体を支えてはくれなかった。尻餅をつくだけにとどまらず、上半身ごとべちゃつと血の海に沈んだ。銃が手から零れ落ちた。何事だ？ とにかくまずは銃を。そのとき、頭上に影が落ちた。天井を見上げる。これは・壺か？ そういえば階段を登ったすぐ右に飾ってあった。改めてみるとなかなか高価そうな・・・  
ぐしゃっ！

壺の破片と一緒に谷山の頭の肉片も飛び散ったようだ。全身に、生暖かく気持ち悪いものが散ってきた。

「お母さん！」

「遅くなってごめんね、睡眠薬を飲まされたくて今の今まで起きられなかったわ。怪我はない？」

よろよろと互いに歩み寄る。

「良かった、お母さんも無事だったのね。」

ようやく辿り着き、強く抱きあう。

「愛も無事でよかったわ。でも、ひどい有り様ね。」

「ええ。でも、ようやく二人きりになれたわね、お母さん。」

「うふふ。」

二人は見つめあい、当たり前のように唇を重ねた。そのままベッドに倒れこむ。

満月が煌々と照らす夜。不気味なまでの静寂の中、愛と香苗の二人の吐息だけがいつまでも続いていた。

## 老人と若人（前書き）

恋愛に年齢なんて関係ありません。どんなに幼かろうが、どんな年をとっていようが、人を好きになる気持ちというのはあつて当たり前なのです。そして、その人を好きになるあまり、自分の世界に没頭してしまうことだってあり得るのです。どんなに見当はずれなことでも思い込んでしまえばそれがその人の世界なのです。

## 老人と若人

僕の名は香坂文人。いわゆる看護師という仕事をしている。病院というところはとても不思議なところだと思う。患者さんの数だけ病気や怪我があつて、中には亡くなれる方もいる。そうかと思えば別の階では出産が行われ、新たな命が誕生している。人生というのは人と人との出会いの連続だ、これは僕の持論。おじさん臭いと思われるかな？でも本当にそう思う。病院だつてもちろんそうだろう？患者さんとお医者さん、看護師さんが出会う。人と出会うことつてすばらしいことだと思う。でもそのお医者さんと患者さんとの掛け橋が病気や怪我だと考えると、病気や怪我也悪いだけじゃないんじゃないかと思つてくるから不思議だ。僕がなぜこんなことを言うかという、ある一人の女性との出会い、それが僕にとつてとても重要な出会いだったからだ。

「高坂さん、紹介しますね。今日からあなたの身の回りのお世話をする、香坂くんです。」

恰幅のいい体格をした小山先生が僕を一人の患者さんに紹介した。「香坂文人です。よろしくお願いします。」

ベッドに上半身だけを起こしてちょこんと佇んでいる一人の老婦人、高坂さくらさん。高坂さんはかすかに微笑み僕に会釈をした。その姿はとても暖かい春を連想させた。

（まさに名は体を表すとはこのことだな。）

僕は密かにそんなことを考えた。

その日から早速高坂さんのお世話をすることになった。食事を運び、食べさせてあげる。病気、そして高齢のせいもあり自分で箸を使うことが困難なのだ。

「ありがとう、あなた香坂さんだったわね。寄寓ね、私と同じ“こ

うさか”なのね。」

「そうみたいです。字は違うみたいだけど、これは何かの縁でしょうね。」

僕がそう言うのと高坂さんはくすくすと笑った。

「僕何か変なこと言いました？」

「あらごめんなさい。いえね、若者らしくない発言だなと思って何かの縁だなんて。」

「あ、そうですか？あはは、恥ずかしいな。」

つい顔を赤らめて頭をぽりぽりと掻いてしまった。

「その仕草もどうかしら？」

そして二人で顔を見合わせて笑った。

「さて、食事も済みましたね。お薬も飲んだし、僕はこれで。」

「あら、もう行っちゃうの？もう少しお話でもと思ったのに。」

高坂さんが残念そうに顔をしかめた。

「すいません、ほかの患者さんのお世話もありますので。何かあったらそのボタンを押してください。すぐに駆けつけますから。」

「ありがとう。それじゃあまた明日ね。」

「ええ、また明日。おやすみなさい。」

そう言って僕は部屋を後にした。

ベッドに横たわる。少し体が疲れている。思わずため息が漏れた。働きすぎかな？天井を見上げ、今日の出来事を振り返った。

「高坂さくらさん、か。」

思い浮かぶのは彼女の顔だった。彼女のあどけなさの残る笑顔。接している時に感じる名前通りの心地よさ。自分とは2世代ほど違うのある女性。なのに目を閉じてもなお高坂さんの顔がちらついていた。

「まさか、僕・・・」

そこまで考えて自分で否定した。さっきも言ったように自分と彼女は2世代ほど歳が離れているのだ。まさか、ね。

翌日は少し早めに目覚めた。早速高坂さんのもとへ。

「おはようございます。今日もいい天気ですね。はい朝ご飯です。」  
窓から差し込む朝日が目に痛いほどだ。

「おはよう。窓際のベッドはいいわね。他の方たちには少し申し訳ない気もするけれど。」

高坂さんが入っている部屋は6人部屋だ。今は2つが空きベッドになっているので実質4人がこの部屋に入院していることになる。

「申し訳ないだなんて。そんなことないですよね、皆さん。」

他の3人の入院患者に呼びかける。

「もちろん。」

「気にすることなんてないですよ。」

「俺なんか窓際がいやでわざわざこっちにしてもらったくらいだしな。」

「変わったやつだなあ、あんたは。」

部屋中に笑いがこだまする。高坂さんも楽しそうに笑っている。

その笑顔を見ると僕は余計に嬉しくなった。

「お食事を食べ終わったらお薬を飲んで、お昼まで寝ましょうか。」

そう言って部屋を出た。途端に寂しさを覚えてしまった。

その日は昼、夜と毎食高坂さんの食事のお世話をした。僕の担当なのだから当然なのだが、他の患者さんのお世話もあるので、あまり高坂さんと喋るヒマもないままにその日は就寝を迎えてしまった。

昨日と同じようにベッドの上で考えるのは高坂さんのことだった。天井に高坂さんの笑顔が広がっている。どうやら僕は高坂さんに患者さん以上の感情を抱いているらしい。

「年甲斐もなく。」

ふとそんな言葉が口をついた。高坂さんが聞いたなら笑うだろうか？若者らしくない、と。（あれ？でも年甲斐もなくて僕が言うとおかしいか？いや・まいいや、疲れているんだろ。早く寝よう。）



あつという間に意識は途切れ夢の中へ。

入院してから何日目かの朝。今日は高坂さんの体調検査の日だ。僕は昨晚からそわそわとしていた。検査の手伝いも僕が担当している。つまりいつも以上に一緒にいれる時間が長いというわけだ。僕の高坂さんに対する気持ちは日に日に増しているらしかった。

「どうですか？体調は。」

車椅子を押しながら僕は聞いた。

「もちろん良好よ。このままドライブに行きたいくらい。」

高坂さんの言葉に僕は吹き出してしまった。

「あら、本気よ。」

「でも今日は昼前から生憎の雨ですよ。どうせドライブに行くなら晴れた日がいいですよ。」

「そう、雨なんだ。」

「元気になつたら晴れた日にドライブに連れて行ってくださいね。」  
何気ない会話。それだけでも十分楽しかった。彼女とは60歳ほどの年齢の差がある。彼女が若いのか、それとも僕がおじさんくさいのだろうか？まあどちらでも構うまい。こうやって楽しく会話できればそれで十分だ。

やはりこの日はいつもの倍近く高坂さんとお話をすることができた。

「どうなのかしら？無事退院出来る日は来るのかしら？」

高坂さんがぼつりとこぼした。

「どうしたんですか？急に。弱気になっちゃった？」

「だってもう私もいい年よ。元気な人であつても急に逝ってしまうような年齢よ。」

高坂さんの言葉に僕ははっとした。気付かされた、いや気付いていたが考えないようにしていたのだ。

「大丈夫、元気になりますよ。一緒にドライブ行くんでしょう？」

僕には気休め程度の言葉しかかけられなかった。高坂さんも気付

いているはずだ。高坂さんの状態がどのようなものなのか。僕は知らされていなかった。それが普通だと思っていた。僕は患者さんのお世話をするだけ。治療に関しては指示されたことを行い、変に介入しない。それこそが僕の中の看護師だった。

「あなたには付き合っている恋人はいるの？」

突然の高坂さんの質問にびっくりした。そんなことを聞いてくるとは思ってもみなかったからだ。

「あ、いえいないんです。募集中です。」

そう言っただけで笑った。思った以上に心臓は高鳴っていた。僕は一体何を考えているのか。

今日は非番、つまりお休みだ。一週間に最低2日は休まなくてはいけないらしい。我が病院の決まりだ。なぜだろう？働きすぎると疲れも溜まって集中力が欠けてしまうからだろうか。たしかにそれは危ない。患者さんの命を預かる仕事だ。失敗やミスは許されない。休むのも仕方がない。だが正直に言うとお休みなど欲しくはなかった。そんなことをしたら高坂さんと会えないじゃないか。これといって趣味のない僕は良い休日の過ごし方というのを知らない。一人暮らしなので自分で食事の用意しなくてはならない。料理は得意だ。特に和食。肉じゃがとか煮魚とか。ん？でもなぜ僕は料理が得意なのだ？一人暮らしだから仕方なく覚えたのか。作り方は・・・いかん、ど忘れしてる。きつと疲れているんだろう。しかしこれからどうしよう。とりあえず街にでも出てみようか。もともと出不精なのでめんどくさいという気持ちは否めない。だがどうだろう、考えようによつてはいいことなんじゃないか？街に出て何かを見たり体験したり。それはそのまま会話のネタになる。つまり高坂さんに話すことが増えるってことだ。いつもいつも今日はいい天気ですねとかご飯おいしいですかとか、同じ内容では高坂さんもそのうち飽きてしまうだろう。そういえばドライブに行きたいと言っていた。きつと彼女は外に出るのが好きなのだ。ならばいつも同じ話よりも週末ど

どこに出かけてきましたよとか、そんな話の方が良いに決まっている。僕は早速寝巻きを脱ぎ捨てポロシャツに綿パンというお馴染みの格好に身を包んだ。もっと若々しい格好をしたら、とよく言われる。・・誰に？同僚？いや・・まいっか。僕は靴を履き勢いよく玄関を開けた。いい天気だ。春の陽気。ふと高坂さんの笑顔が脳裏をよぎった。僕は街に向かって歩き出した。いや、バスだったかな？そう、バスだ。住んでいるアパートのすぐ目の前にバス停がある。そこから駅前の繁華街へと向かうのだ。バスからの景色は覚えていない。疲れのせいで眠ってしまったのだろう。しかしそこまでして話しのネタを探そうだななんて。僕も相当変わり者だな。いや、それほど患者さんとのコミュニケーションを大事にしているのだ。そう自分に言い訳しながらも思い浮かぶのは高坂さんと楽しく会話している姿だった。程なくしてバスは駅前のバス停に滑りこんだ。バスを降り、まず立ち寄ったのはファーストフード店。腕時計を見るともう昼前だったのでとりあえず腹ごしらえを、という具合だ。ハンバーガー１個とポテト、そして飲み物。男にしては量が少ないかもしれない。だがそれだけしか僕は食べないのだ。自分では少食というイメージはないがなぜだがそれだけしか食べなかった。味は残念ながら記憶に残らなかった。大して好きでもないし、第一頭の中はハンバーガーではなく高坂さんが占めていたからだ。食事を終え、一息ついて店を後にした。

（洋服でも見るか。）

僕はお洒落と言うものに人並みほどの興味もない。いい年してチャラチャラしたくないという思いがあった。そういうと勘違いされるかもしれないがまだ21歳。若々しい格好をして何の違和感もない年齢であることは間違いないがどうもそんな気になれないのだ。職業のせいもあるだろうか。仕事中はもちろんネックレスやブレスレットなど着けられない。まあ大体の職業がそうなのだろうが。つまるところ、自分がファッションに興味ないだけだ。それをあれやこれやと言い訳しているに違いない。無理やり自分を言いくるめ、

それでも話しのネタにと一軒の店に足を運んだ。店内は流行の音楽が掛かっていて、色とりどりの洋服が並んでいた。

「いらつしゃいませー。」

店員は若い女性だった。何気に商品を見渡しながら店内を進む。僕は話しかけられるのが好きではない。足は自然と店員とは反対方向に向かう。しかしどうやら店員も僕に買わせようと意欲を出しているようだ。だんだんと僕らの距離は狭まっていく。

「あ、それかなり人気ですよ。どうぞ試着してみてください。色違いもありますんで。」

偶然僕が手に取っていた服を見て店員は満面の笑みで声を掛けてきた。頼んでもいないのに次々とその場に広げていく。これと合わせるのかなり映えますよ、こんな組み合わせも最近の流行ですよ、これなんかも・・・僕は店員に勧められるままに服を受け取っていく。このままではあれもこれも買わされてしまう。焦った僕はどうか理由を付けてそれらを断り、だからと言って何も買わないのも気が引けたので大して欲しいとも思わないＴシャツを一枚だけ買うことにした。

「ありがとうございます。」

店員は笑みを崩さない。僕はその内心をふと考え、そしてそれをかき消し店を後にした。さてこんなもので高坂さんに楽しんでもらえるのだろうか？あてもなく歩きながらそんなことを考えた。そういえばさっき買ったＴシャツの柄ってどんなだったけ？よほどどうでもいいものだったのだろうかちつとも思い出せない。困った性分だ。・・・今のは古い言い方だろうか？

「ハンバーガーなんてハイカラなもの、私は食べたことがないわ。」

翌日、僕は早速高坂の元へ昨日の報告をしに行った。自分が感じたより高坂さんには楽しい休日のように感じてもらっているらしい。ずっと笑顔を絶やさぬまま僕の話聞いてくれている。

「ハイカラなんてものじゃないですけどね。じゃあ今度一緒に食べ

に行きましょう。」

「そうねえ、いつになるか分からないけれど。」

「何言ってるんですか、すぐですよ。」

そう諭す僕を高坂さんは笑顔で見てくれていた。そして、不意に意識が遠のく。顔からベッドシートに突っ込んだ。高坂さんは僕を、いや、倒れたのは、高坂さん。そう、高坂さんだ。僕は高坂さんを抱き起こしナースコールを押す。目は微かに開いたままだった。天井がやけに白い。いや、僕は天井なんて見てない・・はずだ。

「高坂さん。」

名前を呼ばれ私ははっとした。

「もう清掃は済んだわね。」

「はい。」

私は真つ白で皺ひとつないベッドを見た。ここに人がいた形跡など一つも残っていない。直に新たな患者がこのベッドを使うことになるだろう。おかしい人だった。私は香坂さんの笑顔を思い出してふっと口元が緩んだ。あのおじいさんはやけに私の話を聞きたがった。私が今まで接してきたご老人は大抵が話を聞くより自分が話の方が好きな人ばかりだった。だがあの人は私の話を一語一句漏らすまいとするかのように熱心に耳を傾けていた。あの人はきっと私のことを好いていた。うぬぼれでなくそう感じたのだ。だからこそあんなに私の話を熱心に聞いていたのだ。まるで全てを吸収し自分のものにするかのように。そういえばはじめは「わし」と言っていたのがいつの間にか「僕」になっていた。気持ちの上では若返っていたのかもしれない。もしかしたら私の話を真剣に聞くあまり私たちの立場を混同してしまっていたのかもしれない。突然ベッドに倒れこんだ香坂さんを抱きかかえた腕の感触は今でも思い出せる。うつすら開いた目は天井を見ていた。あの時はまだ意識はあったのだろうか？

「あ、それも忘れないようにね。」

「あ、はい。」

私はベッド横のネームプレートを取り上げもう一度だけ見る。『高坂文人』それをポケットに入れ、私は病室を後にした。なんとなくドライブに行きたい気分になった。

## 意識ホスピタル（前書き）

相手を愛していればこそ、自分の境遇よりも相手の事を想うものです。そして、その想いが伝わらないということは不安にも繋がってしまいます。その不安を取り除きたくて、更にその相手を想うのもまた愛情でしょう。

良く覚えていない。最初にそう思ったことだけはしっかりと覚えている。矛盾してる？そうかも。でも、今私がこうしてこの場に立っていること自体、なんか矛盾してる気がする。何故だろう？何か、重要なことが抜けているような。考えすぎ？そうかも。頭はまだ痛い。でも、大したことじゃない。俊之に比べれば、こんなもの、子供だって泣かないくらいのかすり傷だ。透明の、それでいて何も見えないように私の前に立ちただかるガラスの向こう。俊之は、体中にぐるぐると包帯が巻かれ、体中にぐるぐるとチューブが通されている。ピクリとも動かない。本当に生きているのだろうか？もしかしたら、そう見せているだけなのかもしれない。誰が？真実を受け入れられない私の脳？それとも・私は後ろを振り返り、私と同様に悲しげな表情をした、白衣の医師を見た。

「ここは冷えるから。」

彼は、優しく私の肩にピンクのカーディガンを掛けてくれた。私のお気に入りの一品。去年の誕生日に俊之が買ってくれた一品。あのセンスのない俊之が良く、私の趣味に合うものをくれたなんて、今になってふと思う。あれ？そうじゃなくて私がおねだりしたんだっけ？まあ今はどっちでもいいや。俊之が目を覚ましたら聞いてみよう。

「まだ、起きないようだね。」

白衣の医師、隆之は意識したのか、感情のない声でそう言った。私は特に答えるでもなく、かといって意思を隠すわけでもなく、ただその場に立ち尽くした。

「あなたは、そう遠くない時期に退院できるよ。」



「そう。」

「兄さんのことは僕に任せて。でも、できるだけお見舞いに来てあげてくれないかな。」

うつむくように、微かに頷いた。つもりだった。実際に首が動いたかどうか自分でも分からない。でも、動かした衝撃が、頭が一度ずきんと痛んだ。

私は病室のベッドで、見るとはなしに天井の蛍光灯を見ていた。

眩しかった。外は晴天で、きっと春の気持ちのいい風が吹いているに違いない。でもこの病室にはこれっぽっちも入ってこない。窓は開いていない。何故かカーテンも閉められている。一度目を閉じ、そして再び視界に蛍光灯呼び込む。眩しい。真昼の蛍光灯がこれほど刺激的だとは思わなかった。もしかして、少しばかりナイーブになってるんじゃないかしら、私？今頃気付いたのかつて？そうかも。自分では、私はなかなか冷静で、物事を何でも客観的に見れる人間だと思っていたけど。状況が状況じゃあね。

「気分はどう？」

隆之が病室にやってきた。

「ちよつとばかり。」

隆之の顔にさつと不安の影が広がる。

「体調が悪い？」

「冗談よ。」

「気なんて遣うなよ。本当のことを言ってくれ。」

あまりに真剣な顔なので、思わず吹き出してしまった。

「本当に大丈夫よ。ごめんね、ちよつとからかってみただけ。」

そう言ってもまだ納得してないのか、隆之は眉間にシワを寄せたまま私の顔をじつと見つめていた。

「本当に何ともないんだね？」

「ええ。ありがとう。」

そこでようやくほつとため息をついた。やっと納得してくれたら

しい。隆之ってそんなに疑り深い性格だったかしら？それだけ心配してくれてるってことかな。

「事故の後遺症は、僕の視点からはない。と言って良いね。」

「僕の視点からは？」

「そう、外科医の視点として。心の方は、僕には分からない。」

私は首を傾げた。自分で言うのも何だけど、私はそこまでおつむが弱いとは思わない。だけど、あまり回りくどい言い方には慣れない。俊之のようにもっと難しい本を読んだ方がいいかしら？

「たとえば、怖くて車に乗れないとか。」

「車に乗るところか、この病院から出てもないんですけど。分かるわけないわ。」

隆之はふふつと笑った。

「まあそうだね。でも、想像くらい出来るだろ？そのときに恐怖とを感じたりしない？」

しばし考えた。想像する。俊之の運転する真っ白いセダン。私はゆつくりと、少しだけシートを倒す。気持ちよかった。なんか懐かしい感じ。

「まあ、大丈夫かな。」

私の気持ちを見抜いたように、隆之はほっと息をついた。

「おかしいかな？」

「何故？」

「だって、俊之が、なんて言うか、あんな感じになっちゃうくらいの事故だったわけでしょ？正直覚えてないんだけどさ。でも全然心に残ってないって、ちよつとどうかなって自分自身思っちゃうよ。私ってそんなに鈍感だったっけ？」

隆之は、私の肩にそつと手を置いた。まっすぐこちらを見つめる。「僕も詳しい事故の様子は聞いてない。何があって、何の因果であんな大事故になったかは分からない。でも、何があつたにせよ、自分を責めるような考えはしないように。分かったね、これは主治医

としての注意だよ。」

「重大事故だったの？」

隆之が息を呑むのが分かった。しまった、と表情には出さないまでも、失言だったという意識は十二分に伝わった。

「確かに、ちよつとした事故じゃなかったってことは、俊之の様子で分かるわ。」

「あまり、深く考えちゃだめだ。さ、ゆっくり休むといい。」

ふつと、意識が飛ぶような感覚に襲われた。もう何度目だろう？事故から目覚めてから、よくこんな症状に襲われる。突然、意識をシャットダウンされるかのような錯覚。誰に？現実を受け入れられない私？それとも・・・。

2

僅かに開いているカーテンの隙間から朝日が差し込む。小鳥がさえずる。俺はその声で目を覚ます。小鳥の声が目覚まし代わりなんて、随分と優雅に感じるだろう。俺だって昔はそう思っていた。そう、昔は、だ。実際その立場になってみて分かる。やつら、結構うるさいぞ。まだまだ身にしみる4月の寒い朝。もちろん窓は閉めている。鍵だって閉めてるから、隙間が開いてるなんてことはない。なのに、やつらの声はうるさい。俺はうんざりとした表情を作る、もちろん誰も見てくれる者はいないけど。元凶の小鳥に見せてやったところで理解してくれるはずもないし。まあとにかく、うんざりだと自分自身に改めて認識させるがごとく、俺は今日も顔をしかめ。そしてようやく、ベッドから体を起こすのだ。体がだるい。少しばかり頭痛もする。ちらと、ベッド脇のガラス張りの小さな丸テーブルに置かれた時計を見た。今の時間と共に、今日の日付と曜日が示されている。そうか、今日は休日だ。それで、昨日は羽目を外して

夜遅くまで同僚と飲んでしまったのだ。頭痛と気だるさはこのためか。つまり、早い話が二日酔いだ。どうしよう？今日はこれといって予定はない。まあ、いつも通りだが。もう一度寝るか。倒れこむように布団に潜り込み、そして結局は、いまだ大合唱を止めない小鳥たちの声により、無理やり夢の世界から引きずり出されるのであった。のそのそと起き上がり、ふと気付いた。俺が今着ているのは、随分変わった寝巻き。いやいや、スーツだ。どうやら俺は昨日相当酔っていたらしい。自分自身、これはやばいだろってくらいに酔ったときでも、大概はちゃんとシャワーを浴びて床に就く。さすがに着替えないで寝てしまうなんてことはなかった。初めての経験だ。なんとなく大人になった気分。墮落した大人。もちろん褒められたことではないわな。しかし、起きてみると意外や意外、二日酔いはさほどきつくはない。俺もまだまだ若いということだろうか。気がつく、俺の腹は食料をくれとせがんでいた。よしよし、今やるからおとなしく待ってなさい。

昼過ぎになると、二日酔いはすっかり良くなっていた。元々軽かったのだからそれでも長引いた方かな？二日酔いなど数えるほどしか体験したことのない俺としては、こんなものかな、と、すんなり受け入れることが出来た。さて、昼食はどうしよう？朝は適当に済ませたが、体調も回復した今となつては、何かガツンと食べて体調の最終調整をしたいところだ。冷蔵庫を開けた。一人用の小さなやつだ。大した量はいらない。と言うか、たくさん入ろうが入るまいが、俺の冷蔵庫は大抵スラスカだ。今日だって案の定、牛乳とマーガリンしか入ってなかった。これで何をガツンと食べると？小麦粉はある。ホワイトソースでも作ってみる？作ったところで何にかけよう？食パンは朝食べきった。出るしかないな、外。こんなとき彼女でもいいればなあ。俺は、2週間前に別れた幸枝の顔を思い浮かべた。彼女は料理が得意ではなかった。でも俺と一緒に作るのは好きだと言っていた。俺も、一緒にやるのならと、彼女といういろ作っ

た。ホワイトソースはそのお陰で作れるようになったのだ。とはいえ、大して美味しいものを作れた記憶はない。

「味より、一緒に作ったって事実のが大事だと思わない？」

彼女はよくそう笑った。

「精神論としてはいいコメントかもしれないね。でも、不味いものは不味いよ。」

別れる前日も、このようにいつもと同じ会話がなされていた。そう、いつも通りに。なのに何故、その翌日に彼女は去っていったのか。俺は今でも分からない。彼女の去り際の言葉は・・・何だっけ？忘れてしまった。まあいいか。忘れたってことはきつと、彼女のことを忘れようと俺の脳が削除作業に勤しんでいるのだ。きつと今に、彼女のことを綺麗さっぱり忘れられるさ。そんな言い訳を自分にしつつ、結局は彼女のことを必死に脳に留めようとしているのだろう。男って悲しい動物だなあ。そんなことをしたって腹はいつぱいにならないのにな。ぐう、と情けない声で返事をする俺の胃。俺はいそいそと準備を済ませ、昼食に出かけることにした。

俺の住むアパートから、さほど歩かないうちに中心街に出られる。通行人の、そして車の通りが多い。そうか、今日は休みだもんな。改めて思い出し、この記憶力の薄さはなんだと自分でおかしくなった。さて何を食べようかな。通りにはいくつもの食事処が軒を連ねている。古い大衆食堂や真新しいレストラン、全国チェーンのファミレス。どれも、いまいち入る気がしない。腹は減っている。だが、どうも食欲がわかないようだ。おかしいな、部屋を出るときは何か食べたいと思ったのに。二日酔いつて後から来るんだなあ。とりあえずコーヒーでも飲むか。俺は喫茶店を探した。だが、いくら捜しても見当たらない。この付近はどうやら喫茶店やカフェの類がないようだ。まあ二つの違いは分からないが。ちえっ。そう舌打ちした瞬間だった。爆音。いや、言いすぎた。でも何かが激しくぶつかったような音だ。その方向を見た。数台の車があらぬ方向を向いて止

まっている。その顔はどれも、試合後のボクサーのようにぼこぼこだ。煙が上がっている。交通事故か、えらく激しいな。その時だった。頭がずきんと痛んだ。やはり二日酔いは、そう簡単に俺を解放してはくれていなかったようだ。そして、その痛みのお陰か、俺は一つ思い出した。二日酔いが予想に反し軽かったのは、俺の体が若かったからではなく、一緒に飲んだ同僚とノリで試してみたウコンが効いたらしいからだった。忘れてた。思えばいやはや嬉しい誤算だった。吉田はどうか？あいつもすっきり目覚めたかな？同僚の一人を思い出し、そして俺は違和感を感じた。あれ？昨日は吉田はいなかったつけ？いや、つて言うか誰と飲んだんだつけ？思い出せない。ただの一人も。実は俺一人で飲んだと言うオチか？いや、一人で飲むことなんてない。ましてや二日酔いになるほどまで。思い出せなくなるほどべろんべろんに酔ってしまったということだろうか？まったく、そんなに昔の記憶ってわけでもないはずなのに。事故の方に目を戻す。事故の当事者らしき人々、野次馬やらが群がっている。遠いせいか、彼らの言葉は僕の耳まで届かない。その代わり、街中なのに、何故か小鳥の声が響いてきた。空を見ると、電線に名も知らぬ種類の鳥の群れが羽を休めていた。雑踏の中でも聞こえてくるのか。今まで気付かなかった。ちょっと頭が痛いくらいだ。どうやら俺の考えていた以上に、やつらの声はうるさい。

3

病院の廊下は思った以上に寒い。私は両足で床の冷たさを感じた。冷たすぎて痛いくらいだ。もしかしたら事故の影響もあるのかもしれない。

「寒くない？」

声の主は振り向かなくても分かる。私はこくりと頷いた。俊之のくれたカーディガンが、私を芯まで冷やそうとする廊下の魔の手から守ってくれている。私は今日も、俊之のいる集中治療室の前まで

やってきた。

「中には入れないの？」

「うん、まだ容態が安定するまでは。」

私の頭に、隆之の申し訳なさそうな顔が浮かぶ。私は、振り返って微笑んだ。

「ゆっくり寝てるんだし、起こすのは悪いよね。」

隆之は、私の予想通りの表情をしていたが、私の視線に気付きさつと笑顔を取り繕った。隆之ってこんな顔見せたっけ？どちらかというとあまり感情を表に出さない人間だと思ってたんだけど。まあ状況が状況だしね。自分の実のお兄さんが意識不明の重体って時に無表情で冷静に、ってわけにはいかないよね。私は俊之の方へと向き直った。

「どんな夢見てんのかな？」

私の夢かしら？なんてね。私はふつと鼻で笑った。なんてね？ちよつと待って、なんで自分で否定してるのかしら？彼女なんだから彼氏が自分の夢を見るかな、なんて思うのは普通よね？

「きつと、いい夢だよ。」

隆之が言った。私は、何も言い返さず一歩だけ俊之の方へと足を踏み出した。スリッパの、パタンツという音だけがやけに大きく響いたように感じた。

「ここは、静かね。静か過ぎるくらい。」

「そう？望んでるからだろ」

私はふと違和感を感じた。隆之の返事。おかしな返した。

「望んでるって、誰が？」

「・・・あ、ごめん。なんて言うか・・・違うこと考えてた。ここは、まあほら、静かにしなきゃいけないところだしね。」

俊之の寝ている集中治療室を正面に見て、右手はすぐに左へと曲がっていて、左手は比較的長いまっすぐの廊下が続いている。私と隆之以外、この通路に今人は見えない。

「この区画は、人がいなければいけないほどいいと言える所だ。重体

の患者さんがいないってことだからね。」

「俊之みたいな？」

少しだけ、間が空いた。意地悪な言い方だってことは自分でも認識してる。俊之は私にとっても大事な人だけど、隆之にだってそうなものね。

「・・・そう、兄さんみたいな、ね。」

足音が近づいた。まっすぐ前を見ている私の視界の右端に、隆之の横顔が映りこむ。

「気持ちよさそうに寝てるだろ。昔から、兄さんの寝顔は本当に気持ちよさそうだった。」

もちろん知らないわけではない。でも、さすがに本人の弟に対して、そうよね、私もいつも思ってる、なんてことは口には出来ないそれくらいの配慮はできる女よ。当たり前？そう言われれば、そうかも。

「ところで、こんなところでいつまでも油売ってていいの？あなたはあなたで大変でしょ？」

隆之は少しだけ思案するように目を泳がせ、笑顔を見せた。

「まあ、僕はまだまだ一人前の医者とはまだはいかないし。担当も少ないんだ。病院自体これだけ大きいからね。医者はたくさんいるよ。」

「だから、自分ひとりがここでサボってたって問題ないって？」

そう言って、私も口元を緩めた。そして、

あれ？今私、何かしようとしてなかったっけ？と、声には出さず、聞いたかった。もちろん、私が答えられるはずもなく。辿り着く答えは一つ。

「まただ。」

私の口は、意識することなく自然に呟いていた。まただ。また、意識が飛んだのだ。今までは、なんとなくその瞬間が感じられた。でも今のは、全く分からなかった。意識が飛んだ後になって気付い



た。こんなことは初めてだ。後ろを振り向いた。さっきまで横にいたはずの隆之はいつの間にか私の背後に立っていた。先ほどと同じような笑顔だ。でもその笑顔は、心なしが無理をしているようにも見えた。

「まだ帰らなくてもいい？」

隆之は優しい声でそう言った。

「・・・ええ。私は暇な身だし。」

隆之の微笑んだ顔。こんなに綺麗な顔してたっけ。いや、別に汚かったようなイメージがあるわけではないのよ、決して。ただなんと言うか、昔より近づきやすくなったっていうか、正直心に深くとどまるようになったっていうか。不謹慎？そうかも。これは、不謹慎な気持ちかもしれない。私は、もしかしたら、隆之が。

「どうかした？」

「え？」

どうやらちよつと沈黙があつたらしい。周りが分からなくなるくらい考え込んでしまうのは私の癖だった。でも今、心配になるほど長い間黙ってたかしら？

「やっぱりもう部屋に帰ろう。怪我は大したことないけど、もう少し療養が必要だ。」

隆之の、通路を歩く音が響く。しばらくとどまって、私も隆之の後を追って歩き出した。二人の足音がやけに大きく聞こえる。それこそ耳障りなくらい。私は、皮肉をこめて言った。

「やっぱりここは、静かね。静か過ぎるくらい。」

私の皮肉を笑ってくれただろうか。前に行く隆之の表情はうかがい知れなかった。たぶん、もうすぐまた意識が飛ぶ。

幸枝との別れから、3週間が経とうとしていた。俺は、依然一人で、まともな食事を取らずに、ただただ会社とアパートを往復する生活を繰り返していた。別に別れた彼女のことを引きずっているわけではない。どうも体調が思わしくないのだ。食欲もない。先週の休日以来だ。確か、交通事故を見た。その後からだったか、食欲が湧かなくなったのは。もしかして、その事故で誰かが死んで、俺にとり憑いたんじゃないかなろうか。偶然通りかかったただだったのに、まったく、恨む相手を間違えてるぞ。なんて愚痴っているまさにその時だった。けたたましく鳴り出す携帯電話。体が跳ねるほどに驚いてしまった。恥ずかしい。いつの間にか音量設定を間違っていたらしい。鞆から取り出してディスプレイを見る。同僚の川崎だ。同期入社で部署も一緒なので、仲のいい同僚の一人だ。

「なにかあ？」

「何だよ、そのやる気のない声は。」

川崎の声は大きく、高い。体調不良の体にはいささか応える。

「たった今やつとこさ帰り着いたところだ。今更残業しになんか戻らないぞ。」

「違う違う。そんな憂鬱な話しじゃねえよ。」

川崎の声はいつもよりうきうきしているように感じられた。ということは、

「合コン。」

「正解。さすが同期、話が分かるねえ。」

俺は携帯電話をちよつとだけ顔から離してため息をついた。

「毎週毎週よくやるなあ。」

「その合コンのお陰で彼女と知り合ったんだろ。あ、ごめん。元彼女な。」

こいつ。知っててわざと言いやがったな。

「今週末。場所はいつもの処だから。」

「行くとは言っていないつもりだが。」

「どうせ用事なんてないんだろ？独り身でさ。あ、ごめん。」

ここまで容赦なく人の傷口をいじくる奴はそうそういないだろうな。

「最近体調悪いんだ。その日調子よければ、でいいか？」

「じゃあ今週末な。時間は後日報告する。」

今の返事は、有無を言わせないってことか？俺が何を言う隙もなく電話は切れた。ったく、勝手な奴だ。俺は携帯を放った。それはテーブルの中央付近で音を立て、しかし止まるところを知らず崖から落ちる車よろしく真っ逆さまに床へ。ずきんと一つ、まるで何かを忠告するかのように頭が痛んだ。落ちた携帯を車に例えたことに腹を立てたのだろうか？誰がって？そりゃあここ最近俺の不調の原因を作っている奴だろう。やっぱり俺はあの交通事故の当事者にとり憑かれているんだ。テーブルの端に無造作に置いてある頭痛薬を一包だけ手に取りキッチンへ向かった。ガラスのコップに水道水をこれでもかと注ぎ、頭痛薬の口を破った。漢方薬独特の鼻につく匂い。この匂いを嗅ぐと余計に頭痛が悪化しそうだ。俺は意を決してその中身を一気に口の中へ。間髪開けず水で流し込む。それでも「おえっ。」

目が回りそう。なんという苦さだ。毎回こんなことを繰り返しながら、今日も一日が終わる。週末までに治りそうもない。川崎には明日にでもそう伝えよう。俺は、口の中に薬の後味を感じながら、シャワーで汗を流し、倒れるようにベッドへ。そして夢の中へ。

「さていよいよ今夜ですな。お前にもいい出会いがあるといいな。」  
川崎は朝から上機嫌だった。そして、それに反比例するように俺は不機嫌だ。

「だから、俺は行かないって言っただろ。」

「いつ？」

「一昨日だよ。」

「今日も体調が悪かったら、だろ？」

「悪いよ。今朝も薬飲んで来たんだ。」

「薬飲んできたのか」

そこでようやく、川崎は心配そうな表情を浮かべてくれた。しかし、

「じゃあもう大丈夫だな。全く、用意周到だなあ。」

こいつ、一発ぶん殴ってやろうか。

「立ってられないほど辛いのかよ？」

「いや、そこまではないけど。」

「じゃあいいだろ。もう数に入ってるし。心配すんなよ、ホント危なそうだったらちゃんと家まで送ってやるし」

川崎は、男に対してはあまり優しいところを見せない。だから、たまにこんな優しい面を見るとつい、騙されるわけだ。俺はといえば、自分で言うのもなんだが多分他の人以上に、騙されやすい。結論から言おう。行きましたよ、合コン。

定時と同時に動き出す4人組。部署は違えど皆同期入社だ。俺を除いた3人、川崎、高峰、吉田はうきうき気分を隠しきれないらしい。他愛ない話をしている割にはえらく笑い声が大きい。俺はふと先週末のことを思い出した。

「なあ吉田。」

「ん？何？」

「先週末、一緒に飲んだっけ？」

「先週末に高木と？えっと・・・」

吉田の答えも的を得ない。相変わらず頼りない奴だ。

「はい、着きましたよっと。」

もう？俺は一瞬耳を疑った。そして周りを見渡す。俺たちが勤めている会社から、川崎が合コンでよく使うというこの居酒屋までは歩いて30分近くかかる。

「なんか、すごく早く着いたように感じたんだけど。」

その言葉を聞いた川崎は笑った。

「なんだかんだでお前も楽しみなんだろ。気が気じゃないから時間

が分かんなくなるんだよ。」

そうなのか？それにしては不自然な気が。俺はここまでの道のりを思い出した。・・驚いた、思い出せる。ちゃんと思い出せる。もちろん、会話の一語一句全て、というわけではないが4人で歩いてここまで来た。意識が飛んだわけでもないし瞬間移動だっではない。つまり、川崎の言うとおり俺は今日の合コンを楽しみにしていたってことか。

「薬の飲みすぎで意識朦朧なんじゃねえの？」

高峰が笑う。こいつの話す言葉は品がない。正直言ってあまり好きなタイプじゃなかった。適当に流す。

「まあとりあえず入ろうぜ。川崎、相手側はまだなんだろう？」

「もち。俺らより30分遅く来るように設定してるから。」

その間に会場のセッティングや今後の計画の話し合いをするらしい。仕事もそれくらい気を利かしてやってくれればなあ、俺はぼんやりとそんなことを考えた。

店に入るなり、頭痛がした。いつものように、ずきんと一度のみもう慣れてきた。4畳ほどの個室に通される。テーブルを挟んで2列に並んで座る形だ。とりあえず最初は、ということで俺たちは片側に並んで座った。とくにするともなく、俺は部屋を見渡した。

「本日のおすすめ」と手書きで書かれた張り紙。その他にもいくつかメニューが書かれた張り紙が並ぶ。上座には良さげな掛け軸が掛かっていたが、煙草のせいかな少し黄ばんで見える。

「あ、メール来た。もうすぐ着くつてよ。」

川崎の言葉に、その他3人の間に緊張が走る。そう、俺もその一人だ。ちゃっかりその気じゃないかって？そりゃあ、ここまで来たんだ。楽しまなきゃ損だろ？個室の外から、3、4人の女性の話し声が聞こえてきた。あの娘たちかな？ずきん。話し声がだんだん近づく。ずきんずきん。ちよっとおかしいぞ、いつもと違う。

「あ、こっちこっち。」

川崎が顔を覗かせて手招きしている。依然、俺の頭は何かを訴えか

けるように痛み続けている。これは、やばいんじゃないか？

「どうもー、今日はよろしくお願いしまーす。」

その声がやけに色褪せて聞こえた。まるで遠い昔に聞いた声。ずきん。ここに来たことに腹を立てたのだろうか。誰がつて？そりゃあここ最近俺の不調の原因を作っている奴だろう。やっぱり俺はあの交通事故の当事者にとり憑かれているんだ。俺は少しでも落ち着こうとイメージした。倒れこむようにベッドへ。そして夢の中へ。その瞬間、相沢由紀と目が合った。そういうことか。世界が崩壊する・・・

5

ベッドの中で、私は考えていた。さっき、集中治療室前の廊下で私は裸足だった。床の冷たい感触を思い出せる。でも、隆之と並んで部屋に帰ったときはちゃんとスリッパを履いていた。その一時だけ脱いだけじゃないかって？そうかも。でも私はこの部屋からスリッパを履いて行ったのか、はじめから履かずに行ったのか覚えていない。というより、自分で歩いてそこまで行った記憶すらない。俊之のところに行こうと思ったらいつの間にかそこにいた、そんな気がする。意識が飛ぶのだ。事故の後遺症だろうか。

「体調はどう？」

「今すぐにも退院できるくらい元気よ。」

カンペを読むみたいに、棒読みで答えた。どう考えても元気な人間の話し方じゃない。でも隆之の応えは違った。

「そう、それはよかった。」

そう言って笑顔を作る。その顔はどこかぎこちない。台詞とは違い、隆之の表情は私の心情を映し出す鏡のようだ。

「俊之は元気？」

「え？」

隆之は、それだけ言って、凍りついたように何も言わなくなった。やはり何かおかしい気がする。単なる気のせいじゃないかって？そうではないかも。

「笑えないジョークね。ごめんなさい。」

私が言うと、ようやく隆之の口が解凍された。

「あ、ああなんだ。びっくりしたよ。突然何を言い出すのかと思ったら。」

「突然ついでに、今から俊之のところに連れて行ってくれない？」

私は、何とはなしにベッドの側面のネームプレートに目をやる。

「・・・ああ、もちろんいいよ。」

『相沢由紀』の文字が、ひどく歪んで見えた。これは、気のせい？そうかも。

いつもの場所、いつもの配置。私と隆之と、ガラスの壁を隔てて俊之。

「ねえ、隆之。」

出来る限り明るい、いつもの声で語りかけた。

「何？」

振り返る隆之の顔は、やはりどこか不安げな表情。

「私は、まだ退院できないんでしょう？」

「何でそう思うの？」

「私たちはどうやってここまで来たの？歩いて？私の病棟は何階？こことは違う階？だとしたらどう来たの？階段を使って？それともエレベーターを使った？」

隆之は何も言わない。じっと私を見つめている。

「記憶が飛ぶの。何となく、ここまでどうやって来たか分からなくもない。でもそれは、昔の記憶のような、ひどく曖昧なもの。」

「そうなの？」

隆之は、搾り出すような声でそれだけ言った。私は思う。この声

は、本当に隆之が発したもののだろうか？私が、そう言ったように勝手に認識しているだけじゃなくて？気のせいじゃないかって？そうかしら？

「後遺症なのかしら？それとも、何か別の・・・」

思わず電気信号を一旦遮断した。強制終了のような。危ないか？「記憶が飛ぶ？つまり、時間が飛んだという認識があるってことか？」

知らず知らず僕は呟いていた。目を、デスクのパソコンから、ガラスで仕切られた向こうの部屋へと向けた。二つのベッド。二人の男女。二人とも、体中に管やコードが絡みついている。高木俊之と相沢由紀は、共に意識不明の重体でこの病院に運ばれた。回復の望みは薄い。

「高木先生。コーヒーをどうぞ。」

「ああ、ありがとう。」

「どうですか？何か進展が？」

「まあ、パソコンで打ち込んだ言葉を電気信号で送れば、反応を返す。会話くらいはできるようになったよ。」

「このお二人は恋人同士ですよね？高木先生なら、お二人の意識、意思回路を繋げて対話も可能に出来るんじゃないですか？」

この助手は、高木俊之と僕が、兄弟であることを知らない。そして、相沢由紀が俺の高校時代の同級生だということも

「男性の方は、呼びかけても反応がない。まだ夢の中にいるようだ。」

「そうですか。こんなに近くににいるのに、何だか哀想ですね。」

そう言って、一礼の後助手は部屋を後にした。こんなに近くにいるのに、か。僕はもう何年もそんな状態だったんだ。ガラスのすぐ手前まで言って、僕はそっと呟いた。

「由紀。」



好きだ、その言葉は口には出さなかった。二人は、この先、延命措置を続ける限りずっとこのままだろう。僕は思う。例え、兄さんとの電気信号による対話が可能になっても、僕は由紀と兄さんの回路を繋ぐことはないだろう。僕は非道い男だろうか？でも、ここで一番辛いのは、誰だ？そのことを考えれば、僕の気持ちもちよつとは分かってくれると思う。

多分僕は、二人の回復を、望んでは、いない。

僕は、非道い男だろうか？兄さんも、由紀も、その問いには答えてはくれなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8776/>

---

彼と彼女の恋愛事情

2010年10月15日22時09分発行